Vol.4 2025・3

2024 年度

しんあい教育研究ケアセンター活動報告

大阪信愛学院大学

目　　次

はじめに

第 44 回しんあいコンサートー音楽の祭日 in 城東区 2024 1

子育ての中で出会う「親と子どものモンテッソーリ」 3

保育者のための実践講座―子どもの日常保育から考える運動遊びの実践方法 5

思春期セミナー 7

妊娠期メンタルヘルス・セミナー 9

教育相談（のばら） 11

乳幼児を対象としたおはなし会 12

小学校英語教育に関する問題（調査） 14

近隣の幼稚園，小学校，中学校等に対するスクールサポート事業 16

ようこそ大学の研究室へ：中高生対象セミナー 18

前向き子育てプログラム(トリプルP)の実践 20

子どもの虐待予防にむけた研修会の開催 22

まちの保健室 24

医療的ケア児者・家族のための防災プロジェクト 26

菫・鯰江東地域活動協議会百歳体操体力測定会 28

ACP（人生会議）地域推進プロジェクト：もしバナルーム 30

連携協定先等からの依頼事業 32

はじめに

しんあい教育研究ケアセンターは 2022 年 4 月の大阪信愛学院大学の附属施設として出発し，3 年を迎えることができました。本センターは，高等教育機関としての社会的責任を果たすため，本学の建学の精神に基づき，地域社会に対する貢献と有機的連携の実現に努めるとともに，学術研究及び教育水準の向上を図ることを目的と定めております。この目的の達成のため，地域連携，学術研究，教育研修，地域ケア，国際交流の 5 部門を置き，各種研究・事業を展開しております。

本年度の本センター研究・事業募集には，昨年度と同様の 15 件の応募があり，全件採択いたしました。このうち，10 件が昨年度からの継続事業，5 件が新規事業であり，新たな挑戦的事業や発展的に解消した事業が見られております。

また，本年度は，本センターを広く市民の方に知っていただくとともに，本研究・事業のステークホルダーである事業参加者と事業者が一同に会して，本研究・事業の「これまで」と「これから」を考えるオープンデーを 2024 年 11 月 30 日に開催いたしました。いろいろな方からご意見や励ましを頂戴し，次に向かっての気持ちを高める機会となりました。

今後とも，人がよりよく生きることに関心をもち，ウェルビーイングを支援していくことをコンセプトとして，教育学部と看護学部の強みを生かした活動を展開していきたく存じております。

ここに 2024 年度本センター活動報告を刊行できますことに，関係のみなさまには厚くお礼申し上げます。今後とも充実した活動をめざして参りますので、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

しんあい教育研究ケアセンター長　　齊藤　誠一

「第 44 回 しんあいコンサートー音楽の祭日 in 城東区 2024」活動報告

足髙 壱夫

１．はじめに

『音楽の祭日』は、「音楽はすべての人のもの」を基本理念とし、世代・性別・民族を超えたすべての人々が参加できるイベントとして、1982 年にフランスでスタートし、今ではその理念に賛同する 120 カ国以上において実施されるイベントである。

第 44 回しんあいコンサートは、この『音楽の祭日』の理念に賛同し、城東区との共催で『音楽の祭日』の事業の一つとして実施した。

なお、これまで「チャペルコンサート」として実施してきたものを 2023 年度より「しんあいコンサート」に名称を改め、開催数を引き継ぐこととした。

２．目的

つぎの三点を目的としている。

①音楽を通じての地域社会への貢献のため（城東区役所との連携協力に関する協定書、第2条〔協定事項〕第1項「生涯学習、地域の文化の振興に関すること」の具現化）。

②地域の人たちに大阪信愛学院に親しみをもってもらい、よりよい関係づくりのため。

③地域の人たちに本学の教育活動の一端に触れてもらうため。

３．活動実績

「第 44 回チャペルコンサート
音楽の祭日 in 城東区 2024」

日　時：6 月 16 日（日）14 時～15 時 30 分

会　場：大阪信愛学院 学院ホール

出演者：金井秋彦(作曲・ピアノ)、楠本未来(ソプラノ・合唱指導)、奥田昌代(ピアノ)、小齊由美(ピアノ)、ゲニーセ合唱団

来場者：156人

例年と同じ広報活動であったが、参加者が大きく落ち込んだ。QR コードでの事前申し込み数は昨年度と変わらない数であったが欠席者が多かった。また、当日受付が少なかった。今年は、前日に城東区民ホールで音楽の祭日があったことが影響しているのではないかと思われる。昨年は一週間の間隔があった。

今年度は、下記のプログラムで、チェンバロ・ピアノ・歌唱ソロ・合唱・作品発表のコンサートであった。

① J. S. バッハ　チェンバロ　奥田昌代
平均律クラヴィーア曲集 第1巻 第1番 プレリュード
L. N. クレランボ(1676 – 1749)

② F.リスト　ピアノ　奥田昌代
愛の夢

③ 金井秋彦　作品発表　ソプラノ 楠本未来 / ピアノ　金井秋彦
「花のゆくえ」「炎」
「ひかりさすほうへ」「蝉」

④ L.v.ベートーヴェン　ピアノ　小齊由美
ソナタ 第8番「悲愴」Op.13 第1楽章

⑤ アイルランド民謡　ソプラノ 楠本未来 / ピアノ　小齊由美
庭の草

G.ヴェルディ
そは彼の人か～花から花へ　オペラ「椿姫」より

⑥ 中川ひろたか　ゲニーセ合唱団
にじ　指揮　楠本未来
木下牧子
春に

編曲　森松慶子
Joyful Joyful 映画「天使にラブソングを２」より
ピアノ　阪田優美・濱出有紗・犬谷果鈴

アンケート結果の紹介により、活動の様子や成果を伝えたいと思う。

１）自由記述から

▼手話と一緒に歌われて凄いよかったです。▼こういう機会を下さりうれしく思います。▼聞くこと

のないソプラノの歌声に感無量です。今年は合唱団も加わりよかったです。▼もっと回数を増やして下さい。▼社会人が参加可能な音楽クラブを作って下さい。▼レトロな素敵なホールですね。▼学院ホールに感激。初めてホールに入りました。貴学の目指されている清潔さについて感動です。▼椿姫のアリアを久しぶりに生で聞きとてもよかったです。▼金井先生の作品、説明されていたのでより情景が見えてきました。▼すばらしいピアノ演奏と声が一つになって私たちへの励ましが与えられ、よかったです。▼毎年楽しませてもらっています。放課後がんばって練習している信愛の生徒さんも出てもらえたらよいのではないかと思います。▼いつも友だちを誘って来ています。▼めずらしいチェンバロ、初めて聞いたように思います。▼「にじ」の歌を聴いてなぜか涙が・・・。とてもステキなコンサートでした。▼カメラマンの足音が雑音。▼在学生のコーラスや演奏が聴きたい。チャペルでのパイプオルガンも聴きたい。

２）アンケート集計結果（n=78）

①性別

男	女	無回答
24.0	74.0	2.0

②年代

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
8.0	4.0	4.0	13.0	13.0	21.0	37.0

③居住地

城東区	旭区	鶴見区	大阪市内※1	大阪府内※2	その他	無回答
58.0	8.0	9.0	9.0	8.0	5.0	4.0

※1　城東・旭・鶴見区を除く　※2　大阪市を除く

④情報入手

チラシ	区の広報紙	区のHP	本学HP	本学掲示板	町会等掲示板	友人・知人	出演者	その他	無回答
18.0	28.0	6.0	0.0	3.0	3.0	9.0	27.0	4.0	3.0

④-1　チラシ入手先

本学	区役所	図書館	非該当	無回答
9.0	4.0	1.0	80.0	6.0

⑤QRコードによる申し込み

便利でよい	操作に戸惑ったがいいと思う	次回までに操作をできるようになっておきたいと思う	やめてほしい	とくに何も思わない	その他	無回答
57.0	12.0	0.0	4.0	9.0	9.0	10.0

⑥開催日時

満足	やや満足	やや不満	不満	ちらでもな	その他	無回答
72.0	10.0	1.0	1.0	8.0	3.0	5.0

⑦満足度

満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答
79.0	10.0	6.0	0.0	0.0	5.0

⑧来場回数

初めて	２回目	３回目	４回目	５回目以上	無回答
41.0	29.0	13.0	0.0	14.0	3.0

⑨交流の場（城東区役所市民協働課依頼項目）

大いに感じる	感じる	どちらともいえない	全く感じない	無回答
31.0	40.0	18.0	5.0	6.0

４．QR コードによる事前申込制について

昨年度から導入した QR コードによる事前申込みについては、アンケートによると、「便利でよい」「操作みに戸惑ったがいいと思う」が、昨年度の59%から 69%と増加し、一方で「やめてほしい」は7%から 4%と減少した。定着してきたようである。

一方で自由記述に「当日受付を残してもらって感謝」「すべての人が携帯をもっている訳ではない」といった声も寄せられている。

次年度も QR コードによる事前申込と当日受付の併用をおこなうこととする。

QR コードの申込み方法の導入のためかどうかははっきとは分からないが、70 歳代の参加者が、50%(2022 年)→43%(2023 年)→37%(2024 年)と減少傾向がみられ、一方で、50 歳代は 9.3%→11%→13%と増加がみられ、60 歳代は 23%→21%→21%と現状維持となっている。

子育ての中で出会う「親と子どものモンテッソーリ」活動報告

足高 壱夫

１．はじめに

よりよい子どもの成長・発達につながる子育て支援の講座を企画・実施した。講師は、長年幼児教育に携わってこられた大阪信愛学院大学非常勤講師の程野幸美先生にお願いし、保育者としての経験とモンテッソーリ教育の観点から、3 回シリーズの講義と演習をおこなってもらった。

モンテッソーリ教具を使用しつつ講座を実施するため、講座の参加人数は 10 名に限定した。

別に、教育学部 3 年生の学生 1 名がお手伝いと自身の勉強を兼ねて参加してくれた。

以下、2 節・3 節は程野先生に報告していただき、4 節は程野先生と足高で報告する。

２．目的

子どもは自分の置かれた環境を通して日々成長・発達を遂げている。この、子どもの成長・発達はおおむね「家庭」（家庭環境）と「幼稚園・保育園等」（社会環境）によって育まれている。

乳幼児期の子どもにとって、とりわけ大切な成長・発達の場は家庭である。子どもは、家庭生活の中でさまざまなモノや人との関わりを通して自己成長をしていく。この子どもの成長発達の過程で見受けられる子どもの言動をモンテッソーリの子ども観から理解し、モンテッソーリ教具を用いて、家庭における子どもへの関わり方・援助の仕方を体験的に学んでもらうことを目的とした。

あわせて、親子で、モンテッソーリ教具に取り組む体験が有意義な親子の時間共有の場となることを目的とした。

３．活動実績

第１回：「子どもの成長の不思議とモンテッソーリの世界」

9 月 11 日（水）10:30〜11:30

しんあい教育研究ケアセンター　保護者 8 名

講師　大阪信愛学院大学非常勤講師　程野幸美

第 1 回は保護者対象に講座を実施した。家庭生活の中で見受けられる様々な子どもの姿をモンテッソーリ教育理論で説明した。子どもは、家庭生活および幼稚園・保育園等における様々な遊びを通して、自分の感覚・感性を十分に発揮させながら成長を遂げて行く。保護者が理解しやすいように家庭生活の中で出会う様々な子どもの言動を捉え、日常生活に即した子どもとの関わり方について説明した。

今回は、子ども特有の発達に親が寄り添い関わるアプローチ法（言葉のやりとり等）を、モンテッソーリ教具・教材を使用して説明をおこなった。

第２回：「親子でモンテッソーリの教具を使ってみよう！」（初級編）

10 月 19 日（土）10 時 30 分〜11 時 30 分

しんあい教育研究ケアセンター　親子 9 組

講師　大阪信愛学院大学非常勤講師　程野幸美

第１回の講座でお話しした「子どもの学びのベースは日常生活の中にある」ことを踏まえ、今回は実際に教具を扱うことにより、モンテッソーリ教具の持つ教育的意義を理解し、自然な流れでモンテッソーリ教育の魅力が受け入れられるように講座を実施した。モンテッソーリの「感覚教具」を用いた。

モンテッソーリ教具の中でも代表的な感覚教具である「ピンクタワー」と「赤い棒」を使って、「大きい」「小さい」と「長い」「短い」という言葉の世界を子どもたちが体感から取り入れることを理解してもらうことを目指した。

最初に、ピンクタワーを使い、子どもたちは、自分自身の持つ感覚（目で見て・手で触れ）を充分使いながら、少しずつ大きさの異なる 10 個のピンクの立法体を積み上げた。

次に、赤い棒を使い、「棒の長さ」を段階的に体験できるように長さの異なる赤い棒を使って、持ち方を確認しながら、長さの感覚を味わった。

モンテッソーリ教具は、日常生活の行動をベースとした感覚教具へ、そして感覚教具から数教具・言語教具等へと系統付けられている。子どもは、5 感覚を通して体験的に取り入れた学びにより、「ことば」「数を数える」等の抽象的・言語的な世界を学んでいくことを理解してもらった。

第 3 回：「親子でモンテッソーリの教具を使ってみよう！」（初級・中級編）

11 月 16 日（土）10 時 30 分～11 時 30 分

しんあい教育研究ケアセンター　親子 7 組

講師　大阪信愛学院大学非常勤講師　程野幸美

子どもが自分の手を使い、感覚を使って「数を数える」という行為こそ「数理知識」への第 1 歩である。

今回は、モンテッソーリ教具のなかの、数の教具である「数棒」を使い、体感的に「数」を理解してもらった。「数棒」とは、1 から 10 までの数を量（長さ）に置き換えた 10 本の角棒である。10㎝ごとに赤と青の 2 色に色分けされ、「1」を 10ｃｍ、「10」が 100ｃｍとなっている。

まず、「1」を表す 10ｃｍの棒から「10」の表す 100ｃｍの棒を両手で持つ体験を通して、「1 はこんなに短いけれど、10 は両手を広げても届かないくらい長い」というように、数を量の違いとして体感してもらった。

つぎに、数字カードの教具を使って、親子で楽しく数に親しんでもらった。1～10 までの赤い数字が書かれたカード（数字カード）を裏に向けて親子にそれぞれ 1 枚ずつ配布する。全員に配布し終えたら、親子でそのカードに書かれた数字を確認し、子どもがその数字を黙って見て、覚えたら裏に向ける。そして、その記憶しているカードの数字の数だけ赤い円形の紙を並べる。並べ終えたら、数字カードを表に返して、数字カードの数字と子どもが並べた円形の紙の数があっているか、「1、2、3・・・」と子どもが自分で声を出しながら数えた。

最後に、「何もないこと」である「0」の体験を親子でしてもらった。立体的なモノをかごの中に準備し、かごの中から、子どもたちがそれぞれ持っているカードの数字の数だけモノを取り出していく。最後にはかごの中のモノが何も残らなくなる。

4．今後の展望と課題－アンケートを踏まえて－

講座内容は「とてもよかった」「とてもわかりやすかった」がいずれも 100%、今後の参加の意向も 92%が「参加したい」、モンテソーリに関する講座を初めて受講した方の 90%が「とても興味をもった」、10%が「興味をもった」との回答であった。

また自由記述欄には、「実際に教具を使って、やってみながらのお話だったのでわかりやすかったです」「0～10 までをこれほど時間をかけてゆっくり学ぶのだと思いました。子どもの学びのスピードをもっと意識していきたいと思いました」「あたりまえと思っていた『数』も、子どもにとっては初めての認識なのだと気づかされました」「家庭の中でもちょっとしたことで子どもとのかかわり方を変えていけるなと感じました」「温かく楽しい雰囲気で、最初からリラックスして取り組めました」との感想が述べられていた。

反省としては、アンケートの自由記述欄に、3 歳・4 歳・5 歳と、年齢別の講座開催を求めるような記載がみられた。これは、参加対象年齢を 3～5 歳と設定したため、数領域においては各年齢における数理知識の習得段階の違いを踏まえた数教具の提供まで至らなかったことによると思われる。

「保育者のための実践講座―子どもの日常保育から考える運動遊びの実践方法」活動報告

足髙 壱夫

１．はじめに

子どもの運動遊びは「日常生活における身体の動き」と深くつながっている。近年、社会環境の変化により子どもの運動環境も大きく変化している。デジタル化による室内遊びの増加や、安全に外で遊べる場の減少等により日常生活において子どもが体を動かす機会が年々減少傾向にある。

この現状に対して、幼稚園・保育園等で運動遊びの充実を図ることが子どもの健やかな心身の発達に繋がると考えられる。

２．目的

そこで、日本モンテッソーリ協会(JAM)のモンテッソーリ教師資格を取得され、大阪信愛学院幼稚園にて、長年、モンテッソーリ教育法の導入、モンテッソーリ教員の養成、障害児への保育・教育などにたずさわってこられ、大阪信愛学院大学で非常勤講師をされている程野幸美先生を講師にお願いし、子どもの成長・発達に応じた様々な「運動遊び」をモンテッソーリ教育の観点から捉え、幼稚園・保育園等で使用する運動用具を用いた指導法を体験的に学んでもらうことを目的とした講座を実施した。

受講対象は、幼稚園等で運動遊びの指導や援助をされている方、10 名とした。

３．活動実績

日　　時：2025 年 2 月 1 日（土）10:30～12:00
会　　場：大阪信愛学院大学　大学 1 号館 3 階
　　B301 リズム室
定　　員：先着 10 名（見学のみも若干名）
受講者　：幼稚園等で運動遊びの指導や援助をされている方
申込み　：12 月 16 日より QR コードから
参加者　：子ども園の園長・事務長、幼稚園教諭、保育士、幼稚園教諭を目指す学生の 6 名。

４．講座内容（講座レジュメより）

１）子どもの運動と日常生活活動（図 1 参照）
２）動きの分析（図 2 参照）

子どもが日常生活で行っている「蓋をあける」という動作を取り上げ、モンテッソーリ教育法の『動きの分析』を用いて説明した。

この動きの分析を用いて、「跳び箱」と「前転」指導法を考えてもらった。

３）「跳び箱」「前転」の「動きの分析」に基づく指導法

○提示①―活動の手順―

グループワークにて保育者同志で考えてもらった。

○提示②―動きの分析―

提示①で考えた一連の流れ「助走・踏切・着手・開脚・着地」に至る一つひとつの動きを確認した。助走の距離、手のつき方、ジャンプして開脚する動きを様々な用具を使った指導法を提示し体験してもらった。

同様に「前転」の一連の流れについても「手を上にあげる・手をマットに着く・体を丸め回転」に至るまでの動きを確認してもらった。必要な用具を使った指導法を提示した。

○提示③―『動きの分析』を用いた指導法―

提示②の指導法を子ども役と保育者役を交代しながら「跳び箱」「前転」を実施。また、指導法についても各子どもの運動機能と年齢（3・4・5 歳児）に応じた指導法紹介した。

○提示④―保育指導の実践―

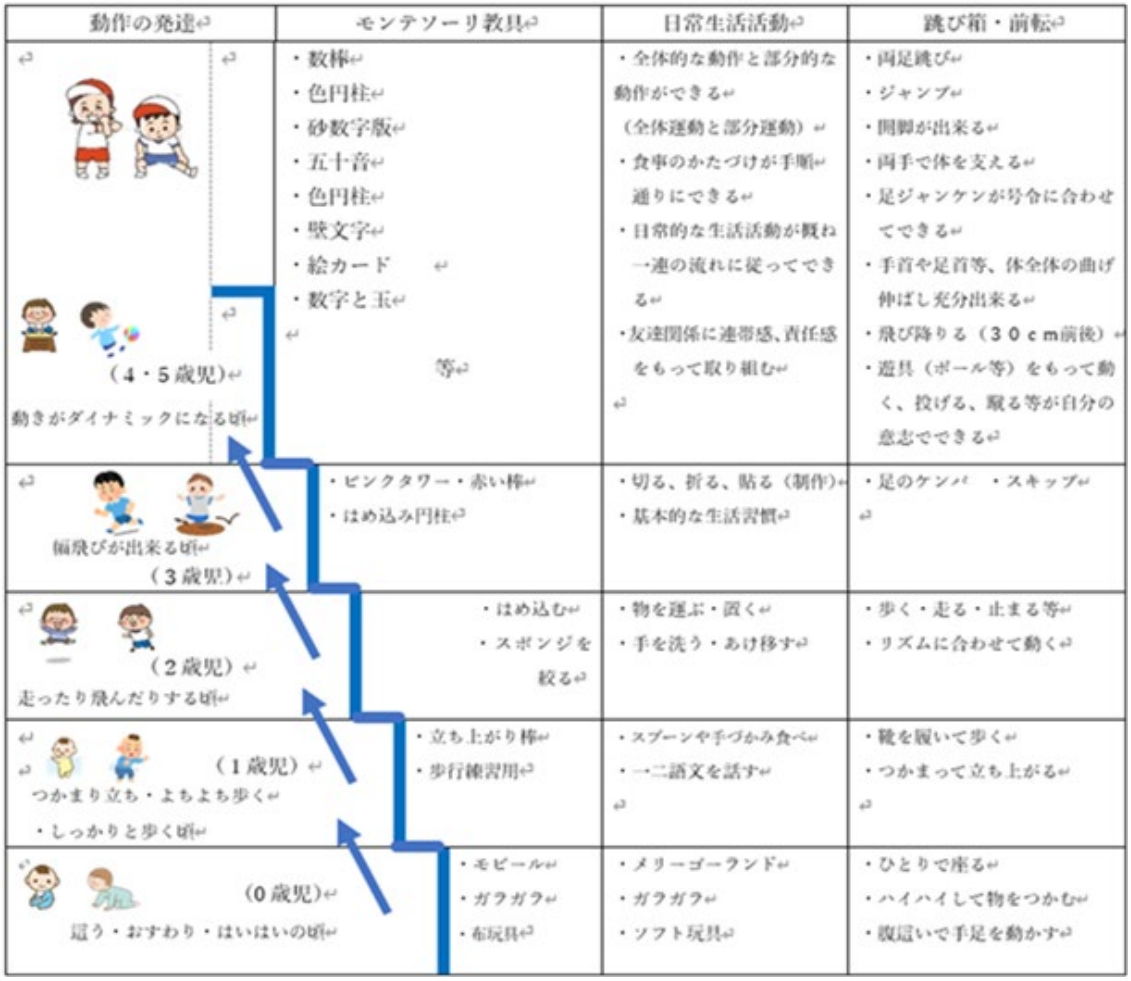
提示①から④を踏まえ、保育指導の要である導入（子どもの意欲を引き出す手法）から「跳び箱」「前転」を子ども（5 歳児）に指導した。次に参加

者も子どもに実践してもらい、スキルアップにつながるようにアドバイスをした。

５．まとめと今後の展望～アンケート～

今回の講座は子どもの運動機能と日常的な動き（這う・飛ぶ・歩く・走る等）の関連性及び生活活動と遊びの重要性を提示してもらった。今後の運動遊びが今回の講座を機会に安全で楽しい子どもの遊び活動となることを望みたい。

今回のような保育者向けの講座の実施を参加全員が希望し、また「園内行事について」希望する記載が多くみられた。これらを踏まえ次回の実践講座につなげたい。



動作の発達	モンテソーリ教具	日常生活活動	跳び箱・前転
（4・5歳児） 動きがダイナミックになる頃	・数棒 ・色円柱 ・砂数字版 ・五十音 ・色円柱 ・壁文字 ・絵カード ・数字と玉 等	・全体的な動作と部分的な動作ができる（全体運動と部分運動） ・食事のかたづけが手順通りにできる ・日常的な生活活動が概ね一連の流れに従ってできる ・友達関係に連帯感、責任感をもって取り組む	・両足跳び ・ジャンプ ・開脚が出来る ・両手で体を支える ・足ジャンケンが号令に合わせてできる ・手首や足首等、体全体の曲げ伸ばし充分出来る ・飛び降りる（３０ｃｍ前後） ・遊具（ボール等）をもって動く、投げる、蹴る等が自分の意志でできる
個飛びが出来る頃 （３歳児）	・ピンクタワー・赤い棒 ・はめ込み円柱	・切る、折る、貼る（制作） ・基本的な生活習慣	・足のケンパ　・スキップ
（２歳児） 走ったり飛んだりする頃	・はめ込む ・スポンジを絞る	・物を運ぶ・置く ・手を洗う・あけ移す	・歩く・走る・止まる等 ・リズムに合わせて動く
（１歳児） つかまり立ち・よちよち歩く ・しっかりと歩く頃	・立ち上がり棒 ・歩行練習用	・スプーンや手づかみ食べ ・一二語文を話す	・靴を履いて歩く ・つかまって立ち上がる
（0歳児） 這う・おすわり・はいはいの頃	・モビール ・ガラガラ ・布玩具	・メリーゴーランド ・ガラガラ ・ソフト玩具	・ひとりで座る ・ハイハイして物をつかむ ・腹這いで手足を動かす

図 1

図 2

「思春期セミナー」活動報告

齊藤 誠一　　北島 倫明

1. はじめに

思春期は、10 歳頃から 15 歳頃までに発現する急激な形態発育と生殖性の獲得となる性的成熟を特徴として、当の子どもたちには多様な心理的影響を与えると言われている。また、この時期は認知発達の上でも形式的操作期に移行し、抽象的思考が可能となり、保護者や教師など大人の発言や指示に対しても疑問を持ったり、指示をきかなかったりするなど第 2 反抗期と呼ばれるような言動を示すようになる。

こうした子どもたちの変化に対して、保護者や教師は自らも経験をしてきたものの、適切に理解し、対応することに困難さを感じることが多い。他方、それまでのような近しい会話や一緒の行う行動も減り、親子関係が希薄になると言われている。

他方、この時期は不登校も増加し、中学校に長期間欠席が続いたり、高校を中退し、通信制高校などへ転校したりする子どもたちも少なくない。

さらには、発達障害を有する子どもたちは主に学校での人間関係に問題を抱えたり、他の同級生など異なる自分に気づき、二次的に自己肯定感が低下したりすることも多く、社会適応に苦しむこともある。

このように思春期の子どもたちは多様な姿を示すことになり、保護者や教師は理解し、適切な関わりをもつことに困難さをもち、対応に苦慮することが多いのが現実である。

このセミナーでは、思春期の保護者が思春期のわが子を理解し、親としてどのように関わっていけばよいかを先述した 3 つの立場から考えていく。あわせて、相談を希望する保護者には適切な相談機関を紹介する。

2. 目的

思春期の子どもをもつ保護者に対して、身体的、心理的に急激な変化を伴う思春期の子をどのように理解し、どのように関係性をもてばいいのかについて、臨床心理学、発達心理学、発達障害学の観点から講義し、思春期の子育てに対する不安を低くめることを目的とする。

3. 活動実績

第1回「思春期の親子関係を見直す－エゴグラムを使って具体的な親子の関わりについて考える－」（対面開催）

講師：芳田 眞佐美　先生
（大阪信愛学院保健センターカウンセラー）
日時：2024 年 11 月 5 日（火）15:30～17:00
実施概要：講師から、臨床心理士としての長年のカウンセリング経験をもとに、思春期の子どもと養育者との関係についてエゴグラムを用いての具体的な説明があり、彼らへの向き合い方についてのアドバイスがなされた。質疑応答では参加者自身の個別的な困りごとについての質問が多く出され、講師より具体的な回答があった。
参加者：9 名

今年も開催します！！思春期セミナー24

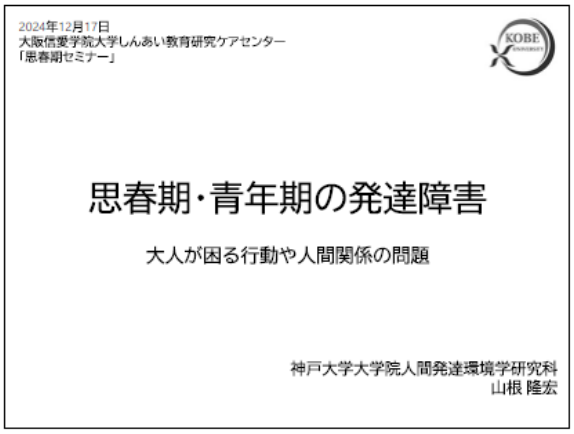
第1回　思春期の親子関係を見直す
－エゴグラムを使って具体的な親子の関わりについて考える－

大阪信愛学院保健センターでカウンセラーをされている芳田先生に，これまでのカウンセラーのご経験から，問題が起こりやすい思春期の親子関係について具体的にお話をしていただきます。いまお子さんとの関係でお悩みの方には，すぐに役立つ内容が満載です。
関心がおありの方には，ぜひとも参加していただきたくご案内申し上げます。

講　師　芳田　眞佐美　先生（大阪信愛学院保健センターカウンセラー）
日　時　2024年11月5日（火）15:30～17:00
場　所　大阪信愛学院大学
しんあい教育研究ケアセンター（大阪市城東区古市2丁目7番30号）

感想：
「自分が子どもに話をしているとき，どういう自我の自分が子どものどういう自我に向けて話しているかがわかった。」
「子どもに何を話しても，無視されたり反抗されたりすることに苛立ちを感じていたが，お互いの心の位置を知ることでちょっと子どもの気持ちが理解できた。」
「自分の心も親の状態であったり，大人の状態であったり，子どもの状態にあったりすることがわかった。夫婦の会話の参考にもなった。」

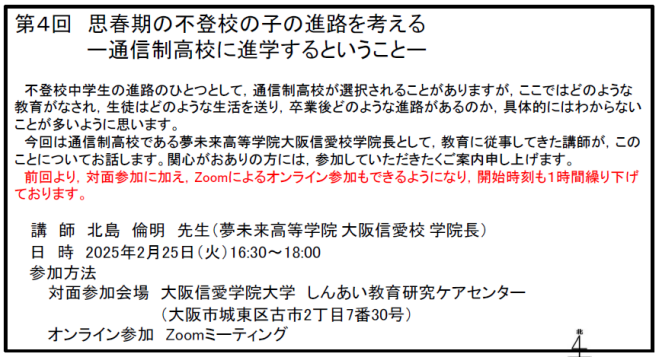
第３回「発達障害のある思春期のこどもの理解」（ハイブリッド開催）



日時：12 月 17 日(金)16:30～18:00
講師：山根 隆宏　先生
（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）
実施概要：講師から、思春期の発達障害の特徴と対応、本人自身の理解の変化，本人への告知など具体的な講義と，実際上の対応先や大学入試上の配慮などが話された。質疑応答では，個々の状況に応じた具体的対応のあり方がアドバイスされた。
参加者：18 名（対面：5 名，オンライン 10 名）

感想：
「具体的な子どもの顔が思い浮かび，この行動にはこういった意味があったのかとわかった。」
「合理的配慮がかなり進んでいることがわかり，学校に相談してみようと思った。」
「いかに環境調整が大切かがわかった。」

第４回「思春期の不登校の進路を考える――通信制高校に進学するということ」（オンライン開催）


第4回　思春期の不登校の子の進路を考える
ー通信制高校に進学するということー

不登校中学生の進路のひとつとして，通信制高校が選択されることがありますが，ここではどのような教育がなされ，生徒はどのような生活を送り，卒業後どのような進路があるのか，具体的にはわからないことが多いように思います。
今回は通信制高校である夢未来高等学院大阪信愛校学院長として，教育に従事してきた講師が，このことについてお話します。関心がおありの方には，参加していただきたくご案内申し上げます。
前回より，対面参加に加え，Zoomによるオンライン参加もできるようになり，開始時刻も1時間繰り下げております。

講　師　北島　倫明　先生（夢未来高等学院 大阪信愛校 学院長）
日　時　2025年2月25日（火）16:30～18:00
参加方法
対面参加会場　大阪信愛学院大学　しんあい教育研究ケアセンター
（大阪市城東区古市2丁目7番30号）
オンライン参加　Zoomミーティング

日時：2 月 25 日(火)16:30～18:00
講師：北島 倫明　（本事業共同企画者）
（夢未来高等学院大阪信愛校校長）
実施概要：講師より，現所属校が設立されるまでの思いと実践が話され，とりわけ高校を不登校により出席日数不足により中退せざるを得なかった子どもたちの受け皿となる学校が必要であったこと，スクーリングだけは絶対に欠けることができないことなど一般の方にはわからないことなどが話された。
参加者：15 名
感想：
「中学校で不登校であった子どもは，通信制高校に進めばよいという考え方があるが，その子にあった学習のスタイルを考えていく上での選択肢のひとつとして考えるべきあることがわかった。」

4. 今後の展望

今年度は，第2回セミナーが中止となり，3回の実施となった。参加していただくと，「子どもの理解が進んだ」などの感想が多く出されるが，参加するまでのハードルが高く，参加者があまり伸びていない。区役所にチラシを置いたり，時間帯を変えたり，オンラインやハイブリッドでの開催にしたりして，参加者の増加を図り，一定の効果はあった。次年度も，学びたい人に学んでいただけるように，広報媒体をさらに工夫して，情報を発信していくことが課題といえる。

妊娠期メンタルヘルス・セミナー」活動報告

齊藤 誠一　　髙橋 篤信　　美王 真紀　　松村 麻衣子

１．はじめに

受精から死に至る生涯発達においては、妊娠期は妊婦に２つの生命が共存し、自己と胎児が同時に発達するという他にない段階といえる。また、妊娠期は新しい家族の誕生を準備する幸福感の高い時期であると同時に、ホルモン分泌の変化や身体的変化による不安等のネガティブ感情も伴うとされている。妊婦は、医療機関での定期検診により出産までの健康管理を行い、出産に備えることになるが、こうしたネガティブ感情に対して心理臨床の立場からのサポートはあまり見られない。他方、産後うつは自死の危険因子とされ、周産期うつに対する治療や予防がなされてきたが、周産期うつの有病率（14.3%）と同程度ながら、そのリスク因子となる妊娠後期うつ（有病率16.1%）に対しては、心理的介入は多くない。以上の点から、妊娠期においては医療的サポートに加えて、メンタルヘルスを維持するための心理的サポートも必要であると考えられる。

２．目的

以上のことから、本事業はその試みとして、妊娠期のメンタルヘルスを維持するために、セミナーを企画、試行し、その効果を検討することを目的とする。あわせて、本学が教育学部と看護学部から構成されており、それぞれにメンタルヘルスケアを担える人的資源を有しているので、学問領域の異なる両学部スタッフによる連携、協働事業としても試みる。具体的には、(1)ニーズ調査、(2)メンタルヘルス・セミナーの２つの事業を行う、

なお、本事業の遂行に当たっては、妊娠期うつの介入研究を行っている次の２名が学外協力者として参画する。

・田中美帆(大阪医科薬科大学・講師、公認心理師)
・茂本由紀(武庫川女子大学・講師、公認心理師)

３．活動実績

1）ニーズ調査（齊藤・田中）

城東区、鶴見区等の関係機関に妊産婦のメンタルヘルスの実態やメンタルケ等の心理的サポートについてどのようなニーズがあるかを把握する。また、妊産婦のメンタルヘルスに関する情報を収集し、ニーズ把握を行うことを目的とする。

図１に示すように、合計特殊出生率（15歳から49歳までの女性の年齢別出生率の合計）は、2005年から2020年の15年間では、大阪市全体は日本全体よりいずれの年でも低く、2020年では日本全体が1.16に対して大阪市全体では1.33となっている。また、2005年から2015年にかけては、日本全体も大阪市全体も微増傾向を示したが、2020年にいずれもかなりの低下を示している。

これを大阪市24区ごとの合計特殊出生率で見ると、区によるバラツキが大きいが、本事業対象と考えている城東区は1.35(2位)、鶴見区は1.50(1位)となっている。さらに、実際の出生数では、城東区が1,187名(2位)、鶴見区が947名(8位)となっており、大阪市全体として、出生状況は低下しているが、城東区、鶴見区では市内でも相対的に高い合計特殊出生率、出産数が示されているので、本セミナーの受講ニーズは一定程度あるものと思われる。

図１合計特殊出生率の年次推移

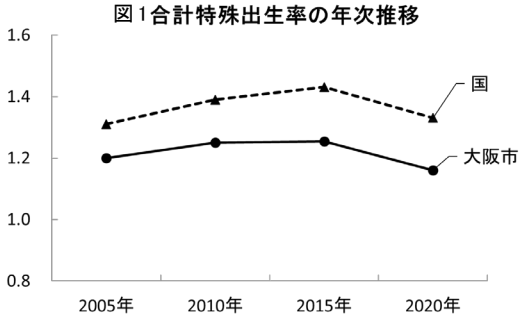


表１　国及び大阪市の合計特殊出生率（2020年）

国	1.33		
大阪市	1.16		
北区	1.04	東淀川区	1.03
都島区	1.08	東成区	1.07
福島区	1.15	生野区	1.29
此花区	1.29	旭区	1.23
中央区	0.97	**城東区**	**1.35**
西区	0.95	**鶴見区**	**1.50**
港区	1.11	阿倍野区	1.27
大正区	1.22	住之江区	1.21
天王寺区	1.19	住吉区	1.27
浪速区	0.80	東住吉区	1.33
西淀川区	1.25	平野区	1.35
淀川区	1.10	西成区	1.06

表２　国及び大阪府，大阪市の出生数

国	727288		
大阪府	55292		
大阪市	17795		
北	1161	東淀川	1114
都島	630	東成	500
福島	695	生野	640
此花	362	旭	568
中央	961	城東	1187
西	874	鶴見	949
港	417	阿倍野	713
大正	278	住之江	548
天王寺	663	住吉	970
浪速	432	東住吉	870
西淀川	551	平野	1075
淀川	1272	西成	365

図2　本セミナーのチラシ

2)メンタルヘルス・セミナー(図２参照)

「妊娠期のあなたのためのこころ健やかセミナー」

＜概　要＞

最初からプレセミナーを含む全6回の募集をするのではなく、まずプレセミナーを受講してもらい、本セミナーの雰囲気や内容を実感してもらった上で、以後のセミナーの参加を検討してもらう。

1)プレセミナー

しんあい教育研究ケアセンターにおいて対面で実施し、セミナー全体の趣旨説明の上、実際のセミナー体験してもらい、本セミナーへのリクルートを行う。

2)本セミナー

オンラインで以下の内容について開催する。

第1回:気持ちへの気づき

第2回:気持ちとのつきあい方

第3回:出産後の生活

第4回:出産までの困りごとの対処法

第5回:出産後の気持ちや困りごとの対処法

＜案内方法＞

城東区役所、鶴見区役所のチラシ台に配架するとともに、本学のウェブサイトにも掲載した。また、田中、茂本のインスタグラムにも掲載した。

＜進行状況＞

予備的に、２名の妊婦に対して、本ゼミナーのチラシを見せながら説明をしたところ、関心はあるが、特定の1日に会場へ行くことには体調の変化もあり、ややむずかしいこと、計画的なセミナーもいいが、いま現に生じている不安や悩みに対して気軽に相談できる場所がないので、ハードルの低い相談場所でなってもらえるといいこと等が述べられた。当初プレセミナーを固定した１日に設定したが、調整がつかず、他の日の希望についても照会があったため、プレセミナーについてオンラインの開催も可能とし、現在日程調整を行っている。

4. 今後の展望

現在行っている予備的検討の結果を踏まえ、セミナー全体の内容の確認を行い、より妊婦のニーズに対応させた内容にしていく。

一定のニーズがあることが把握できたので、こうしたセミナーを必要とされている方へ案内が届くように、広報の仕方をさらに検討するとともにし、心理的にも物理的にも本セミナーへアクセスしやすいものにしていく。

「教育相談（のばら）」活動報告

芝 誠貴　　程野 幸美　　齊藤 誠一

１．はじめに

本活動は、城東区・旭区・鶴見区を中心に地域社会の幼児・児童のすこやかな成長を支援することを目的として実施している。今回で 4 年目を迎えた今年１年間の相談活動を振り返り、それに関する考察を以下にまとめた。

２．事業の目的

事業の目的は次の 2 点である。

〇地域の子育て中の保護者や家族を対象に教育相談を実施する

〇地域のニーズに応え、地域貢献を目標とする

具体的には「子育ての仕方や子どもの対応に迷っている」「ことばの育ちが気になる」「幼稚園（または学校）に行きたがらない」等、地域の保護者・家族の方々の子育てや、子どもの育ちに関する不安や悩みに耳を傾け、子ども達のすこやかな成長・発達を共に願い、共に考えていくことを目的とする。

３．方法

方法：週１回、午前・午後に対面及び電話による教育相談（家庭や保育所、幼稚園、学校における子育ち・子育て・教育などの相談）を実施

対象：幼児・児童・生徒（中学生）をもつ保護者およびその家族

場所：本センター相談室

期間：2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

４．活動実績と考察

今年度の教育相談の利用総件数は 1 ケース 8 件の実施で対象児は児童であった。主な相談内容は「子育ての在り方に関する家族からの相談（継続）」で相談者は祖父母である。親になったわが子の子育て（子と孫の親子関係）についての相談が主となる継続相談である。これまでの継続的な相談を通して思い通りにいかない子と孫の親子関係を、少しずつ受け入れている相談者の心情の変化がうかがえた。

現在、日本の総人口は減少しているものの 2024 年の 65 歳以上の人口は 3625 万人で過去最多を更新しており、高齢化率は 29.3%である（総務省　2024）。また西野・米村(2019)によると、平均寿命の延びと、死亡率と出生率の低下により高齢者は少数の孫と長期的に継続する関係をもつことを指摘しているが、そのことによって祖父母と子と孫との三世代間の家族関係に生じる葛藤も様々な様相を呈するものと考えられる。一方で、中原(2011)の研究では、自己概念において祖父母役割が中心的に位置づけられている高齢者や、祖父母としてのアイデンティティが肯定的に意味づけしている高齢者は、孫との接触頻度が高いことを指摘しており、祖父母としての役割に満足感を感じ、孫と LINE 連絡や接触できる日常が祖父母の肯定的な生き方に影響を与えていることが考えられる。

社会の変化とともに祖父母対象の教育相談の在り方も柔軟に変化する必要性を感じる。三世代家族の関係性が祖父母の心身の健康などメリットにつながることを今一度確認して対応を心掛けたい。

相談件数の内訳と相談内容、利用状況の詳細は以下のとおりであった。

1)　相談件数

総件数 8 件［電話件数：8 件］

2)　主な相談内容

子育ての在り方に関する家族からの相談［継続相談］

3)　対象時の年齢

児童［小学 6 年生］

4)　利用状況

夏期・冬期等の長期休暇を除き、概ね毎月 1 件の利用状況であった。6 月には、2 件の利用があった。10，11 月の利用者はいなかった。

５．今後の展望

活動の広報に力を入れるとともに対象を親に限定せず、祖父母やその他の家族も参加しやすく工夫を凝らし社会の変容に即した幅広い視点から活動したい。

【参考文献】

中原　純(2011)前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係．心理学研究，82(2)，158-166.

西野理子・米村千代（2019）よくわかる家族社会学，ミネルヴァ書房

総務省（2024）　高齢者の人口 https://www.stat.go.jp/topics/topi1211.html

「乳幼児を対象としたおはなし会」活動報告

谷原 舞　　東本 康栄

１．はじめに

2001 年に子どもの読書活動の推進に関する法律が策定され、家庭、学校、そして地域で取組が進められている。2018 年に閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第四次）」では、地域の図書館における取組として、子どもや保護者を対象としたおはなし会が推奨された。子どもの読書離れが進みつつある今、乳幼児期から本に親しむ体験をするため、子どもや親を対象に、絵本の読み聞かせをする機会が求められている。

そこで、本学の保育者養成校としての特色を生かし、乳幼児の親子を対象に学生主体のおはなし会を実施することとした。

２．目的

本事業は、①子どもの絵本への興味・関心の促進、②親子のふれあいの時間提供、③教育者・保育者を目指す学生の資質向上を目的とする。

３．活動実績

（1）大阪府立中之島図書館での実施

このお話会は、3 カ月ごとに大学間でのリレー方式で実施されているもので、本学は今年度 4 月～6 月に担当させていただいた。

①4 月 27 日（土）14:00～
②5 月 27 日（月）10:15～10:45　※保育園児対象
③6 月 17 日（月）10:15～10:45　※保育園児対象
④6 月 15 日（土）14:00～

実施の様子:②は直接保育園にお邪魔して読み聞かせを行った。初めて保育園でのお話会だったため、学生に緊張が見られたが、雰囲気作りを課題に次のプログラムを立て直し、③の回ではバスに見立てた手遊びを取り入れる等、改善を図った。中之島図書館様よりいただいた、参加保育園様による事後アンケートでは、「前回来て下さった時よりもパワーアップしていて保育者も楽しく拝見させていただきました。」「大型バスの歌も子ども達大喜びでした。」といった評価をいただき、学生にとっても、保育者としての課題の発見と自信へとつながり、今後の実施へ向けて大変励みとなった。

（2）守口市立児童センターでの実施

①5 月 25 日（土）10:30～11:00、学生：６名
②9 月 27 日（金）10:30～11:00、学生：３名
③2025 年 1 月 11 日（土）10:30～11:00、
　学生：4 名

実施の様子：各回とも、10 組程度（約 20 名）の親子に参加いただいた。毎年実施させていただいているが、センターの方からは、回を重ねるごとに成長が見られると言っていただいた。

（3）イオンモール鶴見緑地イベント

日時：6 月 22 日（土）13:00～15:00、学生：4 名
参加者：10 名程度

実施の様子：学院イベントとして、広報課から依頼があり、ボランティアとして参加させていただいた。イオンモールの入り口近くのブースで絵本を並べ、来られた親子に個別に読み聞かせをしたり、自由に絵本を見てもらったりした。お話会の時間帯では、館内アナウンスが流れる等、読み手にとっては難しい環境だったが、落ち着いた様子で進められ、子どもたちも絵本の世界に入っている様子だった。

（4）枚方市でのイベント参加

①ひらかた社協ふくしフェスティバル
　日時：11 月 16 日（土）10:00～15:00
　場所：ラポールひらかた
②子ども食堂イベント
　日時：12 月 7 日（土）10:00～15:00
　場所：枚方岡本町公園（枚方ビオルネ横）
③ふれあいルームコンサート
　日時：12 月 26 日（木）10:00～12:30
　場所：牧野生涯学習市民センター3 階ホール

実施の様子：このボランティアは、えほんライブ®や保育ソング作り等を行っている NPO 法人ハーモニークラブ様より依頼を受けたものである。①と②では、参加した子どもたちに絵本の読み聞かせやアクセサリー作り体験のお手伝いを行い、③では参加した子どもたちに絵本の読み聞かせ等を行った。特に②は野外でのイベントだったため、ステージの音や電車の音がある中で絵本に集中しにくい環境だったが、学生は参

加親子に寄り添い、丁寧に進めながら、一緒に絵本の世界を楽しむ様子が見られた。

（5）門真市立図書館での実施
日時：2025 年 2 月 1 日（土）11:00～11:30
学生：7 名
参加者：8 組（約 22 名）
実施の様子：昨年度、同館での参加者は 2 組だったが、図書館の皆様の事前告知等により、今回は多くの参加者の方に集まっていただいた。節分前日だったこともあり、お話会の後に、学生が作成した鬼の箱に向かって、豆に見立てた新聞紙を投げ入れる遊びを行った。読み聞かせだけでなく、歌や体操、最後の遊びを取り入れたことにより、参加された親子の楽しむ様子が終始見られた。図書館職員の方からも盛況だったと言っていただいた。

（6）しんあいケアセンターでの実施
日時：2025 年 3 月 13 日（木）10:30～11:00
学生：4 名
参加者：2 組＋本学図書館職員の方々
実施の様子：昨年同様に、「はらぺこあおむし」の大型絵本を中心に、春をテーマにした読み聞かせを行った。また、図工の授業で学生が制作した「はらぺこあおむし」に関する作品を展示し、おはなし会後も参加者親子が絵本の世界に浸ることができるよう促した。参加者は少数だったが、参加者に応じてプログラムを差し換える等、学生の臨機応変な対応力が発揮された。

今回、城東区役所や本学図書館でチラシの掲示や、親子教室での配布をお願いしたが、配布時期が直前だったこともあり、少人数での実施となった。次年度は、親子教室の実施日や時間帯を考慮した日時設定と、配布時期の前倒しや配布範囲拡大等の広報の工夫が必要である。

4．今後の展望
今年度は、非常に多くの場所でお話会や読み聞かせの機会をいただき、本事業の周知と学生の成長につながったと感じる。次年度も守口市立児童センターでのお話会の依頼を受けている。また、本学大阪信愛学院大学図書館内での実施に向けて、図書館職員の方々とも連携を進めている。本事業の外部への周知をさらに進めていくとともに、学院内での実施も増やし、本学院の認定こども園を利用される親子や小学校児童の参加にもつなげていきたい。

謝辞
ご参加いただいた地域の皆様や、ご協力いただいた門真市立図書館の皆様、守口市立児童センターの皆様、大阪府立中之島図書館の皆様、NPO 法人ハーモニークラブ様、鶴見区、城東区関係者の皆様、株式会社サクラクレパス様、学院関係者の皆様、学生ボランティアの皆様、ご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

「小学校英語教育に関する問題（調査）」活動報告

バニヤン アラン

１．はじめに

英語はよく「世界語」と呼ばれる。したがって、将来に向けて国際交流ができる日本人人材を育成するには、英語力が明らかにその基本となる。そこで、本学はどのようにすればそのプロセスに貢献できるかという疑問に対して、まず状況を調べる必要があるという考えに基づき本調査を行うことにした。

２．目的

城東区にある市立小学校で、英語教育に関してどのような問題に直面しているか把握し、本学として（1）それぞれの状況に応じてサポート・助言ができるかどうか考察の上、（2）可能であると判断した場合に、適切なサポート・助言を提供すること。

３．活動実績

３．１．方法

（1）2024 年 6 月に、大阪府大阪市城東区の市立小学校 16 校に対し、回答要領に沿って、アンケートに 2024 年 7 月 31 日までに回答いただくよう依頼した。

（2）調査結果に基づいて、各校の状況によって本学としてサポート・助言ができるか考察した。

（3）可能と判断した場合に、適切なサポート・助言を提供した。

＊連絡手段：郵便・電子メール

３．２．アンケート内容

Q１．貴校において、英語教育に関する教材やカリキュラムの準備について困難に感じる点はありますか。

Q２．教員の英語力向上のためのサポートが十分であると感じますか。（サポートが不足していると感じる場合、具体的にどのような支援が必要だと思いますか。）

Q３．児童が英語を学ぶ際に最も困難を感じる点は何だと思いますか。

３．３．アンケートの回答要領

（1）可能な範囲で、英語学習担当者等、英語教務にかかわる教員に回答いただくこと

（2）当てはまらない項目は回答不要であること

（3）各回答には字数制限がないこと

３．４．調査結果

（指定された期限内に）回答した校数：2 校*

回答内容①：設問別

Q１

A 校：教材の朱書きの資料はあるが、授業の流れがよく分からないことがある。

B 校：大阪市の政策によりネイティブの先生と共同で行っているため、大きな困難は感じない。

Q２

A 校：サポートは十分ではない。英語専科を設けて、集中的に学べる環境を作ってほしい。

B 校：英検講座や各種研修等の参加で十分だと思う。

Q３

A 校：英単語や文法の定着。楽しく活動をしているが、技能の定着が難しく感じる。

B 校：小学生は文法などを学習しないため、自分の英語が正しいかどうかがわからなくなってしまうことがあり、自信がなくなったりすることもある。

回答内容②：校別

A 校

Q１．教材の朱書きの資料はあるが、授業の流れがよく分からないことがある。

Q２．サポートは十分ではない。英語専科を設けて、集中的に学べる環境を作ってほしい。

Q３．英単語や文法の定着。楽しく活動をしているが、技能の定着が難しく感じる。

B 校

Q１．大阪市の政策によりネイティブの先生と共同で行っているため、大きな困難は感じない。

Q２．英検講座や各種研修等の参加で十分だと思う。

Q３．小学生は文法などを学習しないため、自分英語が正しいかどうかがわからなくなってしまうことがあり、自信がなくなったりするともある。

**個人情報保護のため、対象校の名称は一切公表しないという条件で調査に協力いただいた。*

３．５．結果の考察

上記の回答から、回答者の約半数が効果的な英語教育の実施にある程度の困難を感じていることが明ら

かである。したがって、以下に詳述する対応は、そのような回答者を直接対象としたものである。

３．６．結果に基づく対応

英語教育について悩みをもつ小学校教諭のために、本学ができることには明らかに制約がある（例えば、ネイティブスピーカーレベルの言語スキルを身につけるための集中訓練等を提供することはできない）。ただし、上記の回答に基づき、それぞれの表明された懸念の内容や程度に応じて(小学生のモチベーションを高めるような学習方法や教材を推薦したりして)適切な助言を提供するように最善を尽くした。

３．７．調査の評価（振り返り）

調査を依頼した学校のうちの 12.5%からしか回答をいただけなかったのは、現在の英語教育の状況に全体的に満足している、あるいは調査に回答するための人員や時間が単純に不足しているなど、様々な理由によるものと考えられる。ただし、回答者の数が想定よりも少なかったとはいえ、この調査およびそれに基づいて実施した対応を通じて、たとえ小さなことであっても、地域の小学校における英語教育の質の向上、ひいては将来の効果的な国際交流の促進にも寄与できたことを願っている。

４．今後の展望

上記と同様の事業を今後城東区以外の調査対象にも拡大されることが望ましいではないかと思われる。

「近隣の幼稚園，小学校，中学校等に対するスクールサポート事業」活動報告

村津 啓太　　小川 圭子　　齊藤 誠一　　谷原 舞

１．はじめに

多様な専門性を有する本学の教育学部教員がなすべき地域貢献のひとつに，近隣地域の個々の学校が抱える課題に対する支援があるといえる。また，本学が地域に根ざした大学としてのプレゼンスを確立していく上でも，こうした連携は極めて重要であると考え，具体的なサポート事業を行っていくこととした。

２．目的

幼稚園，小学校，中学校等では，いじめや不登校といった学校不適応問題だけでなく，各学校種に共通の，あるいは異なる幼児・児童・生徒，教員，保護者に関わる問題を有しているが，必ずしも当該学校の教員だけでは解決できないものも多くある。こうした状況において，教員だけでなく，スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカー，スクールロイヤー，地域など含めた「チーム学校」としての多職種連携の取組みが推奨されている。これをさらに進めるために，本学が地域にある大学として，学校教育を専門領域とする教育学部教員がそれぞれに有する専門分野に関わる知見，実践経験，研究成果を強みとして，学校の要請に応じて専門的な支援を行うことを目的とする。具体的には，教員への助言指導だけでなく，教員，児童生徒，保護者等に対する多様な支援を行うこととする。

３．実施計画

(1)支援内容

以下の５点を予定しており，これらをもとに，協力の申し出があった教員に，対象，科目，領域等を具体化した支援可能事業の提出を求める。

①いじめ，不登校など生徒指導，教育相談などに関わる助言，指導，研修会
②学年経営，学級経営などに関わる助言，指導，研修会
③授業など学習指導に関わる助言，指導，研修会
④児童生徒を対象とした心の教育などの授業実施，講演
⑤保護者を対象とした講演
⑥外国人幼児・児童・生徒への個別支援

(2)支援の周知方法

支援に関するリストを近隣幼稚園，小学校，中学校などに配付し，各学校の要請に応じて該当する教員を派遣する。

(3)支援後の展望

支援記録を蓄積し，地域特性に応じて要請される支援の特質を明らかにし，将来的には予防的支援事業へ拡張していく。

４．活動実績

(1)若手教員向け学級経営講座
日　時：2024 年 4 月 17 日(木)
対　象：大阪市立榎本小学校教職員
テーマ：学級経営
派遣教員：村津啓太
講義概要：学級経営のポイントについて事例を用いて説明し，新年度における若手教員の学級経営に対する不安軽減に努めた。

(2)学校敷地内の自然スペース活用に向けた助言
日　時：2024 年 5 月 21 日(火)
対　象：大阪市立榎本小学校教職員
場　所：同校
テーマ：自然スペースの活用
派遣教員：足高壱夫
講義概要：同校の敷地内のある未活用の自然スペースの活用方法について，里山保全に造詣の深い大学教員の知見を踏まえて助言を行った。

(3)不登校に関する教員研修会
日　時：2024 年 6 月 13 日(木)
対　象：東大阪大学敬愛高等学校教職員
場　所：同校
テーマ：不登校
派遣教員：齊藤誠一
講義概要：近年増え続ける不登校の児童・生徒に対する多様な支援の在り方について，具体的な事例を紹介しながら助言を行った。

(4)不登校に関する教員研修会
日　時：2024 年 6 月 27 日(木)
対　象：大阪市立関目東小学校教職員
場　所：同校
テーマ：不登校
派遣教員：齊藤誠一
講義概要：近年増え続ける不登校の児童・生徒に対する多様な支援の在り方について，具体的な事例を紹介しながら助言を行った。

(5)図工指導に関する研修会
日　時：2024 年 7 月 3 日(水)
対　象：大阪市中浜小学校教職員
場　所：同校
テーマ：図工指導
派遣教員：東本康栄
講義概要：図画工作科の指導の充実に向けて，図工指導のポイントや，絵具等の使い方に関する助言を行った。

(6)不登校に関する教員研修会
日　時：2024 年 10 月 9 日(水)
対　象：大阪市立焼野小学校教職員
場　所：同校
テーマ：不登校
派遣教員：齊藤誠一
講義概要：不登校の原因等の解説や，不登校の児童・生徒に対する支援の在り方について助言を行った。

(7)教員向け講話
日　時：2024 年 10 月 7 日(木)
対　象：学校法人アナン学園高等学校教職員
場　所：同校
テーマ：時代おくれの教育論
派遣教員：船寄俊雄
講義概要：教員を対象とした研修の一環として，「時代おくれの教育論」というテーマの下，今後重要視すべき教育観についての講話を行った。

(8)虐待を防ぐための出張授業
日　時：2025 年 2 月 19 日(水)
対　象：大阪市立中浜小学校第 2・4 学年児童
場　所：同校
テーマ：父母からの虐待防止
派遣教員：村津啓太・谷原舞
講義概要：父母による身体的虐待を防止するため，虐待時の相談の重要性を児童に伝える授業を実施した。

(9)校内サポートルームの設置相談
日　時：2025 年 2 月 25 日(火)
対　象：大阪市立焼野小学校教職員
場　所：同校
テーマ：不登校
派遣教員：齊藤誠一
講義概要：10 月に不登校講話を行った当該校の校内サポートルームの設置に向けた具体的な助言を行った。

(10)令和 7 年度職員研修に向けた打合せ
日　時：2025 年 2 月 26 日(水)
対　象：守口市教育委員会
場　所：同委員会
テーマ：不登校
派遣教員：齊藤誠一
講義概要：令和 7 年度の守口市の教職員研修の充実に向けて，不登校をテーマとした研修の在り方についての助言を行った。

５．まとめ

今年度のサポート件数は 10 件であり，昨年度の 3 件と比べて大幅に増加した。その要因として，(1)今年度はサポート案内を前年度の 2 月に郵送し，次年度の学校年間予定に設定しやすかったことや，(2)開学から 3 年が経過し，本学の知名度が上がってきていることなどが要因として考えられる。特に(1)の郵送タイミングは重要であり，継続してサポート案内の早い時期の郵送が重要である。

実施したサポートの特徴として，(1) 不登校をテーマとしたサポートが多いこと，(2) 同じ学校からリピート要請が多かったことが挙げられる。(1)については，不登校が大阪市の学校園における喫緊の課題であることが浮き彫りにされた結果である。今後も，継続して不登校に関するサポートを行う必要がある。(2)については，本学と学校園の信頼関係を築く上で重要な視点である。近隣の学校園とは，本サポート事業のみならず，教育実習や教職インターンシップにおいても連携が必要となる。多くの学校園と良好な関係を築き、地域の教育の充実に向けて貢献を続けたい。

「ようこそ大学の研究室へ：中高生対象セミナー」活動報告

渡部 昭男

１．はじめに

報告者（渡部昭男）は、2024 年度から大阪信愛学院大学に勤め始めた。赴任してすぐに「しんあい教育研究ケアセンター」の研究・事業計画募集の案内があり申請したところ、採択していただいた。

【テーマ】

ようこそ大学の研究室へ：中高生対象セミナー「高学費・低補助」国からの脱出作戦～超少子化問題を４つの手法から読み解こう～

【概　要】

高大連携などを通した学習支援・進学支援がさまざまに進んでいる。本企画は大阪信愛学院大学の渡部研究室が共同で進めている「教育費支援の在り方研究」のエキスを中高生対象に分かり易く伝えるセミナーである。中高生が、子育て教育費支援に係る簡便な分析手法を学び、「高学費・低補助」国から脱出する作戦を打ち立てるというミッションに挑むことによって、社会科学に興味関心を持って進学選択を行う一助としてほしいと考えた。

【４つの手法及び協力者】

手法①家計簿分析：川内紀世美（大阪健康福祉短期大学松江キャンパス講師）、手法②：国会会議録分析：渡部昭男、手法③国際比較／日韓比較：多胡太佑（北海道大学大学院博士課程院生）、自治体施策分析Ａ・母子保健＆保育幼児教育：渡部容子（名古屋女子大学教授）、同Ｂ・学校教育：國本真吾（鳥取短期大学教授）、同Ｃ・学校外活動：近藤剛（鳥取短期大学教授）

２．中高生向けの説明文

2008 年をピークに日本の人口は減少し続けている。コロナ禍で少子化に拍車がかかり、合計特殊出生率は 2020 年 1.34、2021 年 1.30、2022 年 1.26 まで落ち込んだ。今から 30 年後の 2050 年代（中高生が働き盛りの年代）には人口「１億人割れ」さえ予測されている。そこで、中高生の皆に緊急指令が降りた。超少子化問題を子育て教育費（乳幼児期～高等教育）支援から科学する ４ つの分析手法を身に着けて、少子化の一要因である「高学費・低補助」国からの脱出作戦を立てて貰うミッションである。

（キーワード：高学歴社会・知識社会化、高学費・低補助、超少子化・人口減少、一億人割れ、４つの手法、子育て教育費を科学する、中高生セミナー）

３．ZOOM によるセミナーの開催

【準備活動】

中高生が対象ということで、大阪信愛学院中学校・高等学校に相談を持ちかけた。２学期の中高生の多忙なスケジュールの中で、比較的参加が可能な日程として、「12 月 14 日（土）午後」をご教示いただいた。そして、チラシを配布するとともに、保護者連絡網で案内して下さる申し出をいただいた。

当初の企画案から以下の２点を修正した。

・対象の拡大：中高生、保護者、その他一般

・テーマの絞り込み：大学等修学支援制度を分かり易く解説

以下のようなチラシを１千部カラー印刷し、大阪信愛学院中学校・高等学校などに配布した。

【ZOOM セミナーの概要】

日　時：2024 年 12 月 14 日（土）13:15～15:00

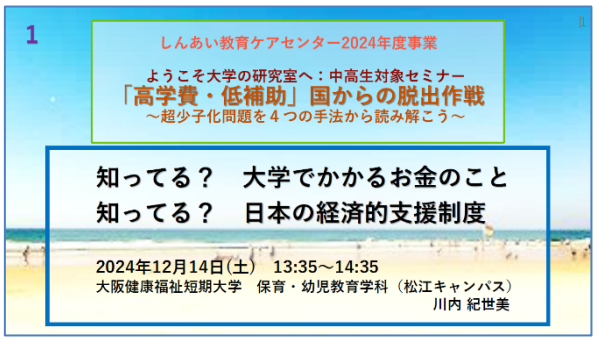
演習１：渡部昭男「中間所得層・多子世帯への拡充～国会会議録検索システム」

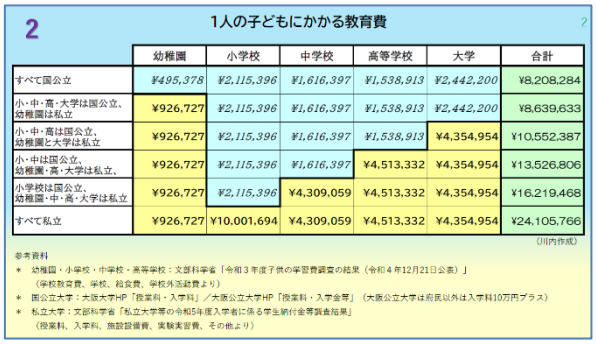
演習２：川内紀世美「知ってる？大学でかかるお金のこと～進学資金シミュレーター」

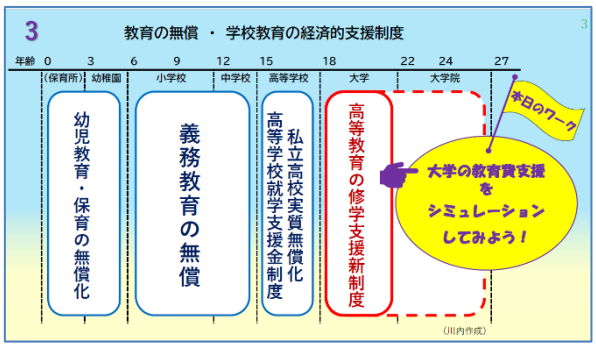
登録者：保護者８人、一般５人

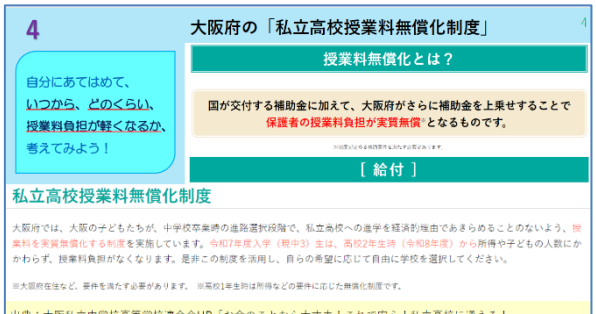
【演習２の概要】

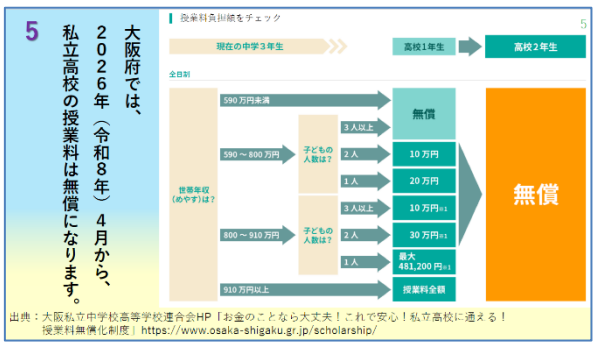
ZOOM セミナーのメインとなった演習２（川内紀世美）の PPT スライド資料を掲載しておく。











なお、特別ゲストの学生Ａさんには、大学での修学支援の実体験を語っていただいた。

４．反省点及び今後の展望

18 歳選挙権への移行を踏まえて、学びの保障・学びの継続のために自身が受けている／受けうる経済的負担軽減を知り、主体的に進路が拓けるよう援助ができれば嬉しい。そして、社会の現象や仕組みを科学的に探究し、多様性の基盤にある共通性や歴史の進展法則を理解する社会科学の面白さ・醍醐味を、身近な超少子化や子育て教育費の問題を通じて伝えられればと思う。そのためにも多くの中高生の参加が得られる工夫を検討する必要があろう。ノウハウを蓄積して、科研費「ひらめき☆ときめきサイエンス」にも申請を行いたい。

【謝辞】ZOOM セミナーにご登録・ご参加下さった皆様、チラシ配布等にご便宜を賜った大阪信愛学院中学校・高等学校の先生方、特別ゲストの学生Ａさん、演習２の川内紀世美講師、「教育費支援の在り方研究」協力者の方々に深く感謝いたします。

「前向き子育てプログラム(トリプルP)の実践」活動報告

岡﨑 裕子　　楢木野 裕美

１．はじめに

近年、我が国において子ども虐待の増加が深刻な社会問題になっており、2022 年度の児童相談所による児童虐待相談対応件数は 214873 件で、増加の一途をたどっている。これは、少子化や核家族化など社会の変化に伴い、親として育つ機会が不足し、親の育児力の低下が要因の 1 つとなっている。このような状況の中で、2024 年に改正児童福祉法が施行され、市町村を実施主体とし、親子関係形成支援事業が創設された。健全な親子関係の形成を支援するための方法の 1 つとしてペアレンティングプログラムが注目されている。

欧米においては、1980 年前後より親の育ちを支援するプログラムが子育てへの教育的介入手段として実践されるようになり、親としての基本的な子育ての知識や技術などを知っておくこと等を目的に、様々なペアレンティングプログラムが開発され、実施されている。「前向き子育てプログラム(トリプル P：Positive Parenting Program)」は、オーストラリアの心理学者マシュー・サンダースが開発したペアレンティングプログラムで、世界 41 カ国以上で実施され、ペアレンティングプログラムとして一定の成果を収めている。日本においても、2006 年から多くの自治体等で実施されている。

私たちは、2022 年度からトリプル P を実施しており、今年度も継続して実施した。

２．前向き子育てプログラム(トリプルP：Positive Parenting Program)の概要

トリプルPは、参加体験型のプログラムで、子どもの自尊心を育み、子育てを楽しく前向きにしていくようにデザインされている。トリプルPの目的は、親の子育ての知識・技能・自信の向上、安全で、活動的で、暴力や争いの少ない環境を創ること、子どもの社会性・情緒・ことば・知能・行動の力を伸ばすことであり、自己充足感、自己効力感、自己管理、自ら行動する者、問題解決の力を身に着けることを重要と考えている。トリプルPの基本原理は、安全に遊べる環境づくり、積極的に学べる環境づくり、一貫したしつけ、適切な期待感を持つ、親としての自分を大切にすることであり、これらの原理がトリプルPの 17 技術を生み出している。

トリプルPで推奨される 17 の子育ての技術には、子どもの発達を促す 10 の技術と子どもの問題行動に対応する 7 の技術があり、この技術の中から、親自身が自分や子どもに合っていると思う方法や、自分ができそうな方法を選択して子育てプランを作成し、実行できるよう支援する。

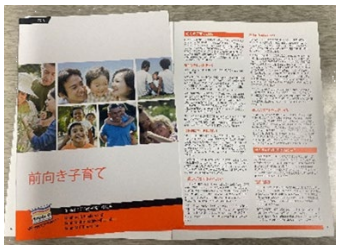
トリプルPは、すべての子どもに有効な単一の介入方法があるのではなく、親のニーズを捉えて、親のニーズに合うレベルで支援が提供できるように、レベル 1 からレベル 5 の介入レベルがある。

レベル 1	メディアを通じて、一般的な子どもの難しい行動の発生要因や対処方法などを伝える
レベル 2	セミナー形式で、子どもの発達や特定の行動など子育て一般に役立つ情報を提供する
レベル 3	ある特定の子育ての問題に対して、短期プログラム(4 回)をチップシート、DVD 等を用いて実施する
レベル 4	集中的に子育ての技術を学びたい親に、子育て法の指導、行動問題への対処手法を教示する
レベル 5	困難な複合問題を抱えた家族のためのプログラム

今回は、レベル 3(プライマリケアトリプルP)を実施した。レベル 3 は、2 歳から 12 歳までの子どもをもつ親を対象とし、親が感じている子どもの特定の問題(例えば、かんしゃく等)に対処するための支援であり、トリプルP認定ファシリテーターと親の 1 対 1 で、1 セッション(15～30 分)を週 1 回、計 4 セッションを実施する。

第 1 回	親が懸念している子どもの問題を特定し、問題行動の記録方法を決める
第 2 回	子どもの問題行動の要因について話し合い、変化への目標を決定し、子育てプランを作成する
第 3 回	子育てプランの実行を振り返り、必要時、子育てプランを改良する
第 4 回	子育てプランの実行を振り返り、目標達成率を確認し、変化を維持する方法を話し合う

プログラムの結果の評価のため、参加者にはプログラム開始前に子育ての体験アンケートへの回答、プログラム実施期間中は問題行動の記録をつけていただき、終了後には、子育て体験アンケート、目標達成スケールワークシート、クライアント満足度のアンケートに回答していただく。

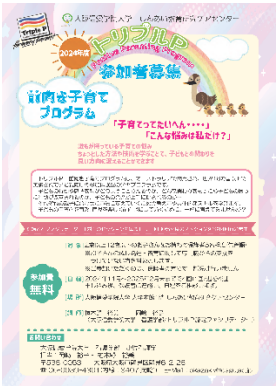


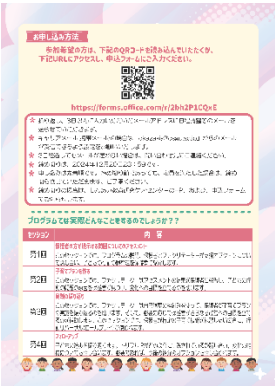
セッションで使用するブックレットとチップシート

３．活動実績

1)　参加者のリクルート

参加者の募集定員を５名とし、募集チラシを作成し、認定こども園大阪信愛学院幼稚園で配布していただいた。また、大学の HP で募集案内を掲載し、参加者を募集した。申し込みは、Microsoft Forms で申込フォームを作成し、チラシ裏の QR コードを読み取って申込フォームにアクセスし、必要事項を記載して登録していただいた。個人情報の保護について参加者に説明し、情報の保護に努めた。





募集チラシ

2)　プログラムの実施結果

(1)　参加者数

参加者は５名で、全員母親であった。１名は家庭の事情により途中でプログラムを中断したが、４名はプログラムを修了した。

(2)　実施期間

実施期間は、2024 年 11 月～2025 年１月である。

(3)　実施場所

しんあい教育研究ケアセンター、相談室で実施した。

プログラム実施会場の様子

(4)　プログラム実施結果

昨年までは、幼児の問題行動を対象としている親が多かった。今年度は子どもの年齢が高い傾向にあり、年齢層の広がりがみられた。特に“9 歳の壁”“10 歳の壁”と言われる発達の転換期の子どもに対する悩みが多いのが特徴であった。さらに「去年からプログラムが開催されるのを待っていた」という母親の発言もあり、この時期の子どもの子育てに悩む親が多い一方で、相談できる窓口が少なく、親が困っている現状も明らかになった。

母親は、子どもの問題に対してブックレットやチップシートを活用しながら子育てプランを作成し、目標を設定した。母親は、プランに基づき子どもに対応し、その時の様子を記録した。母親とファシリテーターが一緒にその記録を見て振り返り、子どもの様子の解釈を示し、次の関わりを考えていくことで、母親が客観的に自分の関わりを考えられるようになった。

プログラム終了時、全員が目標達成に近づいたと評価し、子育て体験アンケートでは、子育てのストレスや困難感、落ち込みの軽減、親の自信、助けが得られたことについて、著明に改善した。また、クライアント満足度のアンケートでは、特にプログラムの質の満足度、ニーズの適合において点数が高く「私の子どもへの関わり方を否定されることなくほめていただいたり、良いところを言ってもらえたりして自信が持てるようになった」「子どもが癇癪を起しても落ち着いて対応できるようになった」「子どもの行動の１つ１つを肯定的に認めてもらえ、親自身のこともほめてもらえて、勇気と自信がもてた」「話をよくきいてもらえて、不安な気持ちが和らいだ」と述べていた。

４．今後の展望

今年度も早期に定員を満たした。また、アンケート結果からプログラム参加のニーズが高いことがわかった。今後は、小学校等リクルートの範囲を広げてトリプル P を継続して実施できるよう検討していく。

謝辞

大阪信愛学院幼稚園園長大谷先生はじめ、先生方のご協力を賜りありがとうございました。

「子どもの虐待予防にむけた研修会の開催」活動報告

岡﨑 裕子　　楢木野 裕美

１．開催目的

我が国の子ども虐待の増加は深刻な社会問題になっており、増加の一途をたどっている。小児医療における虐待対応として求められるのは、入院してくる被虐待児・虐待者への対応だけではなく、普段の親子の日常の様子から養育に問題のある親と子どもに対する虐待予防や子どもの健全育成に向けた育児支援である。養育支援における看護師の役割は大きい。そのため、我々は、小児医療に携わる専門職者の子ども虐待に対する知識を深め、疾患を抱えた子どもの虐待予防に向けた育児支援を実践するための基礎を養うことを目的に、継続して研修会を開催している。

近年、精神的な問題を抱える人が増加している。精神的な問題を抱え子育てしている親は、一般的な親と比較して育児不安・養育困難感が強く、不適切な養育に繋がりやすい。そのため、親への支援が重要であるが、親を理解したうえでの対応は難しく、苦手意識を抱える看護師も多い。したがって、今年度は、精神的な問題を抱える母親の理解と支援をテーマに研修会を計画した。

２．開催方法

1)　研修会概要

(1)　開催日時

2025 年 2 月 1 日(土)14：00～16：00

(2)　講師

岡部英子氏　(地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪精神医療センター副看護部長　精神看護専門看護師)

(3)　テーマ

子ども虐待について学ぼう

「子育てをしている精神的な問題を抱える母親の理解と対応」

(4)　開催方法

感染予防の観点と、参加のしやすさから Zoom ウェビナーを利用したオンライン研修とした。講義資料は、事前に参加者に URL をメールで伝え、ダウンロードしていただいた。Zoom ウェビナーの「Q&A」機能を利用し、参加者からの質問を受け付け、講演の最後に質疑応答の時間を設け、講師から返答し、できるだけ双方向の研修会になるように実施した。

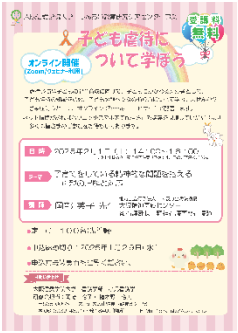
2)　対象

対象は、小児医療に携わる専門職 100 名程度である。

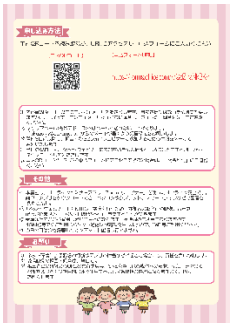
3)　募集方法

研修会の案内チラシを自作した。案内チラシを作成するにあたり、認定 NPO 法人児童虐待防止全国ネットワークにオレンジリボンの画像の使用について申請し、使用許諾を得た。案内チラシを近畿厚生局に小児入院医療管理料 1～5 を届出ている大阪府下の 60 施設に郵送し、しんあい教育研究ケアセンターのホームページに研修会の案内を掲載し、参加者を募集した。また、これまでの研修会に参加し、今後の研修会の案内の送付を希望した 99 名にメールで案内を送付した。

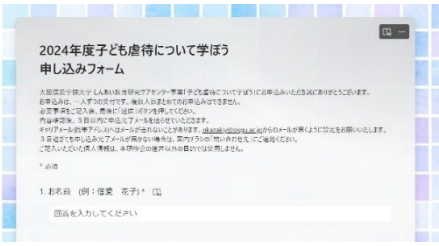
Microsoft Forms を使用して申込フォームを作成した。参加者には、案内チラシに掲載した QR コードを読み込むか、URL から申し込みフォームにアクセスし、必要事項を記載して登録していただいた。個人情報の保護について参加者に説明し、情報の保護に努めた。



案内チラシ表



案内チラシ裏



研修会申し込みフォーム

３．　開催結果

1)　参加者について

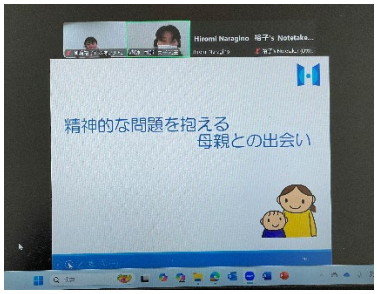
53 名の参加申し込みがあり、そのうち、昨年に引き続き申し込みがあったのは、8 名であった。当日の参加者数は、40 名であった。参加者の勤務地は、大阪府だけでなく、東は北海道、西は広島県まで広域にわたっていた。参加者の職種は、看護師、助産師、保育士、社会福祉士であり、小児病棟や小児外来だけでなく、NICU・GCU や産科で勤務する人も多いのが特徴であった。

2)　研修会の内容

講師には、Microsoft Power point を用いたプレゼンテーションと資料を用いて、講義を行っていただいた。講義内容は精神的な問題を抱える母親の背景や現状、基本的知識、精神的な問題を抱える母親への対応・支援等についてであり、多くの事例を踏まえて説明された。

3)　研修会の様子

講義中の様子



講義中の Zoom ウェビナーの様子

4)　アンケート結果

Zoom ウェビナーのアンケート機能を使用し、参加者に研修会終了時に自由意思によるアンケートへの回答を求め、27 名から回答を得た(回収率 68%)。

問１：研修会に参加した感想について　n=27 (%)

おおいによかった	18(67)
よかった	9(33)
あまりよくなかった	0
よくなかった	0

【研修会の感想(自由記載)】

- 豊富な事例とともに対応について具体的に学ぶことができた。
- 最近は精神的な問題をかかえる保護者が多く、どのように接していけば良いのか考える機会が多くあったので、今回の研修はとても参考になった。
- まずは母親を問題視するのではなく、母親を個として受け止めることが子どもの安全にもつながる大切さを学んだ。
- これまで子どもと母親の双方をサポートしなければと思い焦る部分も多かった。看護師としての限界を知り次に繋げられるように信頼関係を築くことは大切だと感じた。母親の楽になるケア方法を提供する事は今までもやっていた為、間違っていないことを実感でき自信が持てた。

問２：今後の子ども虐待や育児支援に関する研修会への参加希望について　n=27(%)

参加を希望する	24(89)
わからない	3(11)
参加を希望しない	0

４．　研修会の評価および今後の展望

子どもが疾患や障がいをかかえ、医療機関を受診させる親の中には養育に問題を抱える親も多い。親と子どもの近くで、そして多くの時間を関わる看護師に対する子ども虐待予防に期待される役割は大きい。しかし、子ども虐待に関する研修会は数多くあるものの、看護師を対象とした研修会は数が少なく、看護師は手探りで親へ対応し、困難を感じている。

アンケートの回答より、研修会の内容について参加者全員が「おおいによかった」「よかった」と回答し、今後も子ども虐待に関する研修会に「参加したい」と回答した人が多く、研修内容についての満足度は高かった。また、「Zoom での開催は参加しやすいため継続してほしい」という意見もあり、参加者のニーズに合った研修内容となったと考える。

次年度以降も子ども虐待に関する研修会を継続すること、気になる子どもと家族へのかかわり、多職種・多機関との協働・連携など、参加者のニーズに合った研修会を検討したい。

「まちの保健室」活動報告

阪上 由美　岡﨑 裕子　南 裕美　松村 麻衣子　中村 千賀　阪本 三代子　西森 千重美

１．はじめに

日本看護協会は、2001 年度より看護職が地域で展開する疾病予防や健康増進のための相談事業として「まちの保健室」を展開している。本学院も「しんあい教育研究ケアセンター」（以下、本センター）の事業の一つとして、2021 年 10 月から「まちの保健室」を開設し、地域への貢献および地域に目を向けることができる学生を育成するための場となることを期待し、スタートした。

開設 4 年目も、引き続き、大阪府看護協会から後援をいただき、連携協力に関する協定を締結している城東区・鶴見区において、施設型と出張型の「まちの保健室」を開催した。施設型「まちの保健室」は本センター、出張型「まちの保健室」は鶴見区にあるイオンモール鶴見緑地と城東区大学周辺の地域活動協議会等において開催し、施設型では、各回 20 分程の健康関連ミニ講座を企画した。2022 年度から開催している大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」は、2025 年度まで鶴見区と連携しながら継続している。ここに、2024 年度の「まちの保健室」の活動について報告する。

２．目的

本センターにおける「まちの保健室」の事業目的は以下の通りである。

1）地域の全世代の住民の心身の健康、子育て、生活習慣病予防、介護等の様々な不安や悩みに対し気軽に話せる場を提供し、健康づくりをはじめとした健康管理・増進への貢献に寄与する。

2）地域の医療・福祉・保健に関する組織・団体と連携し、地域のニーズに応じた健康関連のまちづくりに参画する。

３．「まちの保健室」活動

1）場所と日時

（1）施設型「まちの保健室」

場所：しんあい教育研究ケアセンター

日時：2024 年 5 月 14 日（火）、7 月 2 日（火）、11 月 5 日（火）、2025 年 1 月 14 日（火）の 10 時から 12 時

（2）出張型「まちの保健室」

場所：イオンモール鶴見緑地　1 階グリーンコート

日時：2024 年 9 月 3 日（火）、2025 年 3 月 11 日（火）の 10 時から 12 時

（3）地域からの依頼「まちの保健室」

月日	地域	活動場所
7 月 27 日	菫地域活動協議会	夏祭り
8 月 3 日	関目東地域活動協議会	盆踊り
11 月 3 日	大阪信愛学院大学	学祭
11 月 9 日	鶴見区健康まつり	鶴見区民センター

（4）大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」

月日	地域	活動場所
7 月 7 日	茨田南活動協議会（ふれあい喫茶）	茨田南福祉会館
2025 年 2 月 27 日	茨田地域活動協議会（百歳体操）	茨田福祉会館
2025 年 3 月 8 日	茨田東活動協議会（ふれあい喫茶）	茨田東福祉会館

2）**活動実績**

（1）施設型「まちの保健室」

施設型の実施内容は、血圧測定・血管年齢測定・骨密度測定、身長・体重測定後の健康相談・育児相談である。全 4 回実施し、来所者は延べ 114 名であった。来所者層は、60 歳以上 85.7%、60 歳未満 14.3%であった（不明 2 名除く）。2022 年度より来所数が伸び、リピーター来所者割合が増えている（6 回目開催時のリピーター率は 78.6%）。

2024 年度　施設型実績

月日	来所者数	健康相談			子育て相談	測定のみ
		60 歳以上	60 歳未満	不明		
5 月 14 日	21	18	3	0	0	0
7 月 2 日	32	26	6	0	0	0
11 月 5 日	33	28	4	1	0	0
1 月 14 日	28	24	3	1	0	0

2024 年度　健康関連ミニ講座

月日	タイトル	講師	参加人数
5 月 14 日	汗かいてますか? 熱中症対策を考えよう	上田博之	9
7 月 2 日	「人生会議」って何ですか? ～もしもに役立つ ACP～	秋山正子	12
11 月 5 日	意外と知らない 石けんの魅力？	竹見八代子	14
1 月 14 日	色を使って免疫力アップしてみませんか　Part2	東本康栄	15

健康関連ミニ講座は、計 4 回開催し、参加者は延べ 50 名であった。開催時間について「丁度よい」と回答した人が平均で 80.0%、内容については「大変よい」「よい」と回答した方が平均で 96.0%であった。

(2) 出張型「まちの保健室」

出張型の実施内容は、血圧測定・血管年齢測定後の健康相談である。2 回実施し、来所者は、延べ 65 名であった。来所者層は、60 歳以上の高齢者層が 72.3%を占めていた。来所呼びかけをしても、子育て世代層は自分事ではないという感じで断られる傾向にあった。

2024 年度　出張型実績

月日	来所者数	健康相談		子育て相談	測定のみ
		60 歳以上	60 歳未満		
9 月 3 日	33	26	7	0	0
3 月 11 日	32	20	11	0	1

(3) 地域からの依頼「まちの保健室」

城東区菫鯰江東地域包括圏域で 2 か所の盆踊りで「まちの保健室」を実施した。菫地域活動協議会では 40 名、関目東地域活動協議会では、56 名の来所者があり、若い世代の方も健康相談を受けられた。鶴見区健康まつりでは、広報誌の効果もあり、血管年齢・骨密度測定を楽しみにしていた方が 80 名以上も来所した。

(4) 大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」

2022 年度をキックオフとして、3 年かけて、鶴見区 12 地域活動協議会で健康相談を実施する。2024 年度は 3 回実施し、平均 35 名の来所者があった。

(5) 学生ボランティア参加状況

施設型）11 月 5 日：3 名、1 月 14 日：1 名

出張型）9 月 3 日：3 名、3 月 11 日：2 名

地域からの依頼）8 月 3 日：3 名、11 月 9 日：4 名

4．今後の展望

施設型と出張型の特徴を活かしながら、2025 年度も「まちの保健室」を実施する予定である。各回 20 分程の健康関連ミニ講座の開催や健康手帳、来所者への特典等により、リピーター率は 80%近くになっている。しかし、新規来所者は伸び悩んでいる状況である。リピーターの方にはより満足いただけるよう、傾聴する時間を多くもち、継続して健康管理や健康相談を行っていく。一方、新規来所者確保に関しては、ケアセンター事業として健康に関する講演会等を実施し、本学の「まちの保健室」を周知していく活動も検討が必要である。また、来所者の年齢層は、60 歳以上の高齢者層であった。子育て世代や平日仕事をしている働き世代の住民に対しては、引き続き、地域からのイベント等に参加しながら、疾病予防や健康増進に努める。

今年度も看護学部 1・2 年生の学生ボランティアが「まちの保健室」に参加した。来所者への血圧測定やコミュニケーションを行う中で、住民への健康管理・増進への支援が看護師の役割であることが学べたと考える。来年度は、「まちの保健室」のボランティアを経験した上級学年が後輩を育てる体制なども検討し、学生間で「まちの保健室」の役割を継承できる工夫も必要であると考える。

謝辞

ご来所くださった地域住民の皆様や連携協力に関する協定を締結している城東区・鶴見区の皆様、ご後援いただいた大阪府看護協会の皆様、関係機関の皆様、開催にあたる場所の提供をしてくださったイオンモール鶴見緑地の皆様、看護学部の教員、ご支援・ご協力くださった全ての皆様に深く感謝いたします。

「医療的ケア児者・家族のための防災プロジェクト」活動報告

阪上 由美　　足高 壱夫

１．はじめに

地域で暮らす難病や障害をもつ子どもは、人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアが必要であることが多く、地震や台風などの自然災害の際、電源装置や消毒液・マスク等の衛生用品の確保、避難所や在宅避難等の状況に応じた避難など、いくつもの課題に直面する。

2013 年度の災害対策基本法の一部改正により、災害時要援護者対策の制度や仕組みは整いつつあるが、医療的ケアを必要とする子どもの災害時支援計画を作成している自治体は 2 割にも満たないという報告もある（森脇，2020）。一般的に、災害時の助けとなる割合は「自助＝70%」、「共助＝20%」、「公助＝10%」と言われており、災害の規模が大きくなればなるほど、行政の対応力は小さくなり、自助・共助の重要性が増し、地域ぐるみの災害対策が大切となる。しかし、難病や障害をもつ子どもの特性を踏まえた災害時の備えや避難行動・訓練を具体化されている地域は少ないのが現状である。そこで、指定避難所となっている大阪信愛学院大学の附属施設である「しんあい教育研究ケアセンター」の場を生かした福祉避難所機能を有する情報ハブ拠点の体制構築のための基盤整備（セーフティネットの構築）を目指し、プロジェクトを立ち上げた。本プロジェクトは、城東区自立支援協議会を共同事務局に置き、城東区保健福祉課、城東区社会福祉協議会、城東区障害者基幹相談支援センター、大阪府立光陽支援学校、その他保健医療福祉機関の関係者と運営を行っている。ここに、2024 年度の「医療的ケア児者・家族のための防災プロジェクト」の活動について報告する。

２．目的

災害時の福祉避難所機能を有する情報ハブ拠点の体制構築を目指した地域防災力を高めるプロジェクトの企画運営を行う。

1）医療的ケア児者を支援する保健・医療・福祉・教育における防災の取り組みと課題を明らかにする。

2）医療的ケア児者を支援する多職種間の連携：平時における顔の見える関係づくりを行う（防災を通じて連携支援体制を構築する）。

３．活動実績

1）定例会の実施

場所：しんあい教育研究ケアセンター

日時：2024 年 5 月 21 日（火）、7 月 9 日（火）
9 月 17 日（火）、11 月 12 日（火）
2025 年 1 月 18 日（火）、3 月 18 日（火）の
14 時から 16 時

各回、参加者は 9－11 名であった。

月日	議事内容
5 月 21 日	①2024 年度プロジェクト方針
7 月 9 日	①ストスピーカー：二瓶　智充　様　（アサヒサンクリーン） 「能登半島地震での訪問入浴の活動、この活動から見えてきた課題」 ②第 4 回「防災ワークショップ」開催について
9 月 17 日	①ゲストスピーカー：講師　奥　知久院長（医療法人ぽちぽち会おく内科・在宅クリニック）「防災×まちづくり」
11 月 12 日	①ゲストスピーカー：　香西摩矢子（大阪府医療的ケア児支援センター・コーディネーター） 「大阪府医療的ケア児支援センターの取組と課題」 ②第 5 回「ワークショップ」について
1 月 18 日	①第 5 回「ワークショップ」について ②医ケアっ子「クリスマス会×防災」　の振り返り
3 月 18 日	①第 5 回防災ワークショップの振り返り ②2025 年度プロジェクトの方針

2）第 4 回ワークショップの開催

場所：大阪信愛学院大学 1 号館　B201・2 教室

日時：2024 年 8 月 31 日（土）13：30～15：30

内容

1 部	能登半島地震での訪問入浴の活動　この活動から見えてきた課題 講師：アサヒサンクリーン（株）　二瓶　智充　様
2 部	訪問入浴体験会、ワークショップ

参加者は会場 20 名、オンライン 7 名であった。

アンケート結果では、「能登半島地震の現状と課題」について、「非常に参考になった」と回答した方が 80%であった。「防災意識が高まった」と回答した方も 100%であった。「ネットワーク構築のために必要なこと」についての自由記述では、「情報の一元化」「要援助者の把握と介護者の確保に向けたシステム」「普段から災害を意識した顔の見える

関係を築くこと」「公民協働での取組み」等、多くの意見がよせられた。

3）第5回ワークショップの開催
場所：大阪信愛学院大学　学院ホール
日時：2025年3月9日（日）13：30～15：30
タイトル：　医療的ケア児者の個別支援計画を考えよう！
内容

1部	災害時個別避難計画とは
2部	事例を基にグループワーク、質疑応答

参加者は19名であった。
アンケート結果では、「災害時個別支援計画を理解した」については、80%の方が「理解した」と回答した。「グループワークの満足度」は100%の方が「満足」と回答した。「要援護者の個別支援計画を作成する上で必要なこと」についての自由記述では、「当事者や支援者がキチンと理解出来るような場を作ることが必要である」「支援を必要としている人と支援を行う人をつなぐネットワーク構築が重要である」という意見があった。

4）クリスマス会×防災
場所：大阪信愛学院大学1号館　学院ホール
日時：2024年12月14日（土）10：00～12：00
活動：地域の小児専門薬局「ゆい薬局」が主催する「クリスマス会」に共催し、防災研修「トヨタカローラ香川様のカーシェアによる給電の取り組み」を担当した。医療的ケア児19名の家族が参加した。
アンケートの結果では、「防災研修の満足度」については、80%の方が「満足」と回答した。また、自由記述では、「人工呼吸器を24時間装着しているが、災害時に避難所へ避難できるか心配」「地域の保健師から避難所へ避難しても発電機の電気は避難所を運営するために使うから医療機器を充電するために電気を使うことはできないと言われている。災害時はどこで医療機器の充電をして命をつなげばいいかわからない。」と災害時の電源について、不安な声がよせられた。

４．今後の展望
2024年は、阪神淡路大震災から30年を迎え、大阪府内でも医療的ケア児者の防災についての講演が多数開催された。改めて、災害は身近に起こると再認識できた一年であった。本プロジェクトの今年度の目標も、昨年度同様「医療的ケア児者を支援する多職種間の連携：平時における顔の見える関係づくりを行う」であった。その目標を達成するために、定例会ではゲストスピーカーをお招きしての意見交換、ワークショップ、共催のクリスマス会を企画・運営し、改めて、「災害弱者である医療的ケア児者を知ってもらう」そして、地域の住民も含めた人々との「つながり」の重要性を再認識でき、「知ること」「つながること」は、今後も引き続き、重要なキーワードとなると考える。
2025年度、防災プロジェクトは4年目を迎える。「医療的ケア児者を支援する多職種間の連携」について、具体的な体制整備を構築していくことが、来年度の課題であり、ワークショップを開催しながら、検討していく。

謝辞
本プロジェクトの事務局である城東区自立支援協議会様、趣旨に賛同いただいた城東区保健福祉課、城東区社会福祉協議会、城東区障がい者基幹相談支援センターわくわく、大阪府光陽支援学校、有限会社オールケア旭、ゆい薬局、当事者家族の皆様、また、ゲストスピーカー、セミナーの講師をお引き受けいただいた皆様、セミナーに参加くださった地域の支援者様、当事者家族様に深く感謝いたします。

「菫・鯰江東地域活動協議会百歳体操体力測定会」活動報告

中村千賀　　長尾匡子　　竹中泉　　阪上由美　　秀島真衣子

１．はじめに

「いきいき百歳体操」は高齢者の介護予防を目的に開発され全国的に実施されている。本学周辺の菫・鯰江東地域包括支援センター圏域の４カ所（菫、関目、関目東、鯰江東）においても、世話人や地域住民が主体的に開催している。

本プロジェクトでは、2022 年度より、参加者の継続支援及び意欲の維持・向上を目的とした体力測定会を実施している。また、2023 年度より各地域で体力測定結果の解説や「100 歳まで元気に歩く！転ばない歩き方のコツ」をテーマとしたミニ講座を開催した。

2024 年度も、菫・鯰江東地域包括支援センター圏域の４カ所（菫、関目、関目東、鯰江東）で体力測定会及び測定結果解説会を実施したので報告する。

２．目的

本プロジェクトの事業目的は、以下の通りである。

1）菫・鯰江東地域包括支援センター圏域４か所（菫、関目、関目東、鯰江東）で実施されている百歳体操において、体力測定会を実施することで、地域住民の継続的な参加を促し、モチベーションの維持・向上につなげる。

2）体力測定会の結果返却のタイミングに合わせて、測定結果解説会を企画し、介護予防に貢献する。

３．活動実績

1）体力測定会の開催

測定項目は身長・体重、血管年齢、握力、立ち上がりテスト、2 ステップテストである。加えて、厚生労働省が提示する「介護予防マニュアル第４版」の「基本チェックリスト」にも回答していただいた。測定結果は、今後の生活や運動・体操に向けたアドバイスを添えた結果用紙として作成し、後日参加者に返却した。この結果用紙には昨年度の測定結果も掲載し、参加者自身が経年変化を比較できるようにした。また、百歳体操に参加しての感想や、大学への要望に関するアンケートも実施し、今後の活動の参考とした。

各測定会についての詳細は以下の通りである。

(1) 鯰江東地域活動協議会での体力測定会実施
日時：2024 年９月５日 9:15～11:00
場所：鯰江東老人憩の家
実施概要：参加者は 28 名で平均年齢は 79.5 歳、昨年度も参加した方は 14 名（50%）であった。アンケート結果では「身体の動きが楽になった」等、身体的効果を感じている方が 18 名（64.3%）と多かった。運営に際しては、井内伸栄教員の協力を得た。また、学生４名がボランティアとして参加した。

(2) 関目東地域活動協議会での体力測定会実施
日時：2024 年９月 18 日 12:30～14:00
場所：関目東老人憩の家
実施概要：参加者は 20 名で平均年齢は 83.2 歳、昨年度も参加した方は 11 名（55%）であった。アンケート結果では、「人と交流する機会が増えた」という回答が 12 名（60%）と多かった。運営に際しては、阪本三代子教員、西森千重美教員の協力を得た。また、学生４名がボランティアとして参加した。

(3) 菫地域活動協議会での体力測定会実施
日時：2025 年２月 17 日
場所：菫憩いの家 13:00～14:30
実施概要：参加者は 26 名で平均年齢は 78.8 歳、昨年度も参加した方は 17 名（65.4%）であった。アンケート結果では「人と交流する機会が増えた」との回答が 15 名（57.7%）と多かった。運営に際しては、南裕美教員、今井響流教員、西森千重美教員の協力を得た。また、学生２名がボランティアとして参加した。

(4) 関目地域活動協議会での体力測定会実施
日時：2025 年３月５日 9:00～11:00
場所：関目憩の家
実施概要：参加者は 25 名で平均年齢は 83.8 歳、昨年度も参加した方は 19 名（76%）であった。アンケート結果では、「足腰が鍛えられた」等、身体的効果を感じている方が 16 名（64%）と多かった。運営に際しては、西森千重美教員、永石恵美子教員の協力を得た。また、学生３名がボランティアとして参加した。

関目地区での百歳体操の様子（百歳体操前後に体力測定を実施）

2）測定結果解説会

今年度は、各地域で結果返却時に測定結果の説明と 10 分程度のミニ講座を実施した。全地域で「2 ステップ」の値が目安とした基準より低かったことに着目し、その改善に向けた助言や情報提供を行った。体力測定会に参加されなかった方々もミニ講座に加わり、生活習慣の改善について学ぶ機会となった。実施状況は以下の表の通りである。

月日	地域
10 月 30 日	関目東地域活動協議会
11 月 7 日	鯰江東地域活動協議会
3 月 3 日	菫地域活動協議会
3 月 26 日	関目地域活動協議会

3）　大学への要望（体力測定会時のアンケート結果）

体力測定会時に実施したアンケートでは、大学への要望として以下のような意見が寄せられた。

「健康維持や認知症など、大学ならではの新しい知識を提供してほしい」、「健康についての講演会を開催してほしい」

4）　地域からの依頼

今年度は、地域からの依頼を受け、体力測定を実施した。

(1)第 8 回ニュースポーツ大会

日時：2024 年 11 月 17 日 9:30～11:30

場所：関目小学校体育館

実施概要：　百歳体操とは異なるが、地域からの体力測定会実施の要望を受け、実施した。測定項目は血管年齢測定、握力測定、立ち上がりテスト、Timed up & go テストである。子どもから高齢者まで、幅広い年齢層の方々が約 70 名参加した。結果用紙を工夫し、実施後すぐに返却した。運営に際しては、高橋篤信教員の協力を得た。今後も、地域の要望に応じた活動を検討しながら、引き続き支援していきたい。

ニュースポーツ大会での体力測定の様子

４．今後の展望

昨年度に引き続き、4 カ所すべての地域で体力測定会を開催することができた。また、学生がボランティアとして参加することで、地域住民と関わる機会を得るとともに、地域を知る貴重な経験となった。これは、今後の学修や大学の社会的貢献活動の理解を深めるだけでなく、地域の活性化にもつながる重要な機会であると考える。

次年度は 4 学年が揃い、大学業務との調整が難しくなることが予想される。しかし、住民からの強い要望もあるため、地域住民が健康でいきいきとした生活を送れるよう、引き続き体力測定会の協力・支援する体制を維持していきたい。また、大学への要望については、しんあい教育研究ケアセンター運営委員とも連携しながら、講演会等の企画の検討も必要と考える。

謝辞

大学が百歳体操に関わることに理解を示してくださった菫・関目・関目東・鯰江東地域活動協議会の皆様、百歳体操に参加されている地域住民の皆様に深く感謝いたします。

「ACP（人生会議）地域推進プロジェクト：もしバナルーム」活動報告

吉田 智美　　秋山 正子

１．はじめに

人生の最終段階において、自分の意志や希望を身近な人たちや医療福祉従事者と共有しておくことには大きな意義があり、アドバンス・ケア・プランニング（advance care planning：以下 ACP）が推奨されている。日本においては、ACP が厚生労働省の取り組みや、診療報酬上の要件となったことも相俟って、行政職や医療従事者の間で急速にその認識が広まってきている。その一方、デリケートな話題であることなどから、国民への十分な普及には至っていない。

以上のような背景から、申請者らは、本事業の基盤となる事業に 2022 年度から取り組んできた。そのなかで、①地域で活動する行政・医療・保健・福祉従事者との連携体制の構築、②地域住民の ACP に関する現状とニーズの把握、③ACP を身近に考えることができる住民参加の会（もしバナルーム）の実施を主な目的とし、2024 年度は活動「もしバナルーム」の継続と、地域での活動を行っている先駆的な取り組み関係者からの情報収集と取り組み事業への参加を開始した。また、申請者らのスキルを活かして、大阪府下の訪問看護ステーションで開催されている医療関係者に対する ACP 研修のファシリテーターも行った。それらの活動のなかで、大学教員として若い世代への伝達を充実させていくこと（担当授業での取り組み）も手掛けてきた。

２．目的

今年度（令和 6 年/2024 年）の本事業の目的は以下の通りである。

1）「もしバナルーム」を開催することにより、参加する地域住民が、次の 2 側面での気づきや学びを得ることができる。
(1)リラックスした雰囲気のなかで自身の価値観や大切にしたいこと、そこから ACP（人生会議）を身近に考える。
(2)参加者とのゲーム、対話を通して、他者の価値観への気づきを共有する時間を体験する。
2）ACP に関連して、地域で活動する行政・医療・保健・福祉従事者との連携体制を拡大・継続する。

３．活動実績

1)人生会議の周知、もしバナルームの広報

申請者の一人が、7 月 2 日(火)本センター主催の「まちの保健室・ミニ講座」において「『人生会議』って何ですか？～もしもに役立つ ACP～」をテーマに 12 名の参加者を対象に解説を行った。その終了後に 8 月開催の「もしバナルーム」の広報も行い、関心のある方へのアプローチを試みた。

2)「もしバナルーム」の実施

(1)8 月 20 日（火）10 時～11 時半に一般市民の希望者 8 名と 2 名の教員を対象に約 90 分間でゲーム並びに ACP に関する説明を実施した。
(2)季節に応じた音楽や飾りつけなどを行い、穏やかな環境に配慮した。プログラムについて、参加者からは概ね肯定的な評価（「良かった」が 100%）を頂いた。参加者の中には、区内の在宅医療・介護連携相談支援室や連携拠点事業に従事する各々のコーディネーターの方も参加頂いており、今後の活動連携への基盤ともなる事業となった。

3)先駆的な地域活動プログラムへの参加および情報収集

昨年度、参画した日本在宅ケア学会学術集会で我々の取り組みに関心を持ってくださった地域活動者 T 氏より、S 市の地域住民との対話を通して、人生や死など多様なテーマを共有しておられるプログラム「ここでカフェ/ここでサロン」の紹介を受けた。そこで申請者が各々1 回、9 月に「ここでカフェ」、12 月に「ここでサロン」に参加し、その実装について情報収集を行なった。

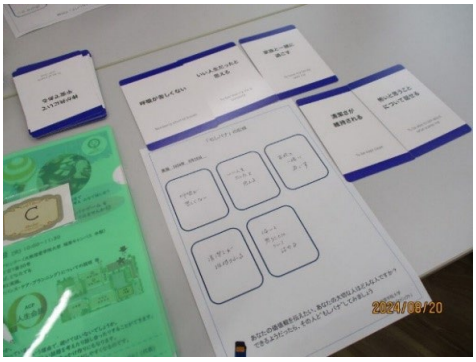
開始当初、「ここでカフェ」は平日の昼間、「ここでサロン」は、土曜日の夕方開催であったが、「ここでサロン」は、参加者の要望もあり、対話中心のプログラムになったようである。開催曜日、時間帯を変えることで、参加者層の違いを狙っておられたようだが、次年度は開催曜日も変更となる予定であり、プログラムの目的により、順次変化するようである。

この先駆的事業は、現在、欧米で知見が広がっているコンパッション都市を基盤に学位論文を書かれた T 氏が主宰しておられ「ここで」の由来は、『こ：コンパッション』『こ：コミュニティ』

『で：デス（死）』の頭文字をとったもので、地域において生や死に関連した多様な話を自由にするとのことであった。

「ここでカフェ/ここでサロン」の当日の参加者は50歳代～70歳代の5～6名であったが、いずれも忌憚なく自らの体験を基に話し合っておられたことは印象的であった。地域での緩和ケア実装の足掛かりとなるこうした集まりは、地域住民が自助の精神で支援できるようになるための、仕掛け作りとも理解できた。

こうした取り組みから、隔月開催など継続的に会合をもっていくことの必要性を学んだ。



４．今後の展望

今年度、大学の学年進行に伴い申請者２人の本事業遂行のための時間にも限りが見えてきた。１回の「もしバナルーム」の実施と先駆的取り組み事業の見学、参加がなんとか実施できた。これまでの成果については、本センターのオープンデイ（11月30日）でもポスター発表する機会を頂いた。今後の活動についても、公的な研究会・学会での発表も含め広く伝えながら、もしバナルームへの参加者を増やしていけるよう務めていきたい。

今年度の良い成果を活かすために、今後の開催にあたっては下記の事項を実践課題にしたいと考える。

1)　開催時期は、８月とし、しんあい教育研究ケアセンターで開催する。

2)　開催広報、参加者募集は、５月、７月のまちの保健室開催時の『ミニ講座』参加者を対象に、12名程度を目安として行う。

3)まちの保健室開催時の『ミニ講座』枠において、次年度もACP関連講座の提供を検討する。

これらの課題を踏まえて、次年度も本事業の継続展開を企画したいと考えている。

５．謝辞

ご協力くださったもしバナルームにご参加の皆様、ここでカフェ/ここでサロンの主催者様、ご支援・ご協力くださった全ての皆様に深く感謝致します。

「連携協定先等からの依頼事業」活動報告

１．大阪市鶴見区社会福祉協議会からの依頼

事　業　名	おやこ夏休み SPECIAL EVENTS みんなで楽しもう
主　　催	大阪市鶴見区社会福祉協議会
実施日時	2024 年 8 月 21 日（水）10 時半～12 時
会　　場	鶴見区民センター
参　加　者	鶴見区在住の幼児～小学生とその保護者 42 組 （子ども：68 名、保護者：45 名）
依頼内容	「子ども向け体験イベント」の開催
講　　師	大森宏一 准教授（投げ方教室） 東本康栄 助教（紙コップで遊ぼう） 学生ボランティア（教育学部 1 年生 4 名）
内　　容	投げ方教室：ブーメランとエックスジャイロを作り、飛ばして遊びながら「投げる」動作を学んでもらう。 紙コップで遊ぼう：１万 5 千個の紙コップを使って、試行錯誤と想像力を駆使して自由に遊んでもらう。 参加者を 2 つのグループに分け、それぞれ 30 分ずつ体験してもらった。

２．門真市こども政策課からの依頼

事　業　名	公民連携子どもの居場所『こども LOBBY』「キャリア教育イベント」
主　　催	門真市役所（こども政策課）
実施日時	2024 年 10 月 20 日（日）15 時～16 時
会　　場	イズミヤ門真店 2 階 フリースペース
参　加　者	門真市在住の小学生 1 年～4 年生　14 名
依頼内容	将来の職業選択の参考になるイベントの実施
講　　師	高井明徳 教授
内　　容	「理科の先生と一緒に実験を楽しもう」 実験 1：「人工いくら作り」 実験 2：「スライム作り」
参加者感想	アンケートには、「楽しすぎです！また参加したいです！」「とても楽しんでいました。色が変わったり、触ってみたり、はっきりと五感で感じられるので、低学年でも夢中になれることができました」「楽しく参加できてよかったです。イクラもスライムも作るの楽しかったです」などのお声をいただきました。

３．鶴見区役所保健福祉課（子育て支援）からの依頼

事　業　名	親子参加型講習会
主　　催	鶴見区役所（保健福祉課）
実施日時	2024 年 10 月 25 日（金）10 時 30 分～11 時 30 分
会　　場	鶴見区役所 4 階 403 会議室
参　加　者	鶴見区内在住の 2～3 歳の未就園児親子　13 組
依頼内容	未就学児親子が一緒に楽しく学べる講習会の実施
講　　師	程野幸美 本学非常勤講師
内　　容	「親子の触れ合い」を目的として内容を企画した。名札作り、手を使うことの重要性を伝え「手遊び」、リトミックを導入し「リズム遊び」、季節感を取り入れつつ参加者同士の交流として「ハロウィンじゃんけん遊び」、アイマスクをすることで視覚以外から自分の子ども知る「お母さんの 5 感覚体験」、貼る体験遊びとして「モビール作成」をおこなった。
参加者感想	・ピカチュウの手遊びで子どもは大はしゃぎでした。 ・「お母さんの 5 感覚体験」ではわが子との新鮮な出会いがありました。

事　業　名	親子参加型講習会
主　　催	鶴見区役所（保健福祉課）
実施日時	2025 年 1 月 29 日（火）10 時 30 分～12 時
会　　場	鶴見区役所 3 階 302・303 会議室
参　加　者	鶴見区内在住の 2～4 歳の未就園児親子　9 組
依頼内容	未就学児親子が一緒に楽しく学べる講習会の実施
講　　師	大森宏一 准教授 学生ボランティア（教育学部 1 年生 6 名）
内　　容	「親子で遊ぼう！」 身近なものを使っての遊び、家に帰ってもできる遊びを中心にしてプログラム 子どもたちの名前を書いた名刺を交換、手遊び、新聞を使った防災スリッパづくり、宝物探しのゲーム、パラバルーン、歌など。 学生が事前に練習してきた「ぼよよん行進曲」に合わせて親子で踊ったり、「鬼のパンツ」を歌ったり。
参加者感想	・3歳が参加できる無料イベントが少ないと思っていたので参加できてよかった。 ・最後の歌を一緒にうたって楽しんでいたのがよかったです。 ・子どもがすごく楽しんで参加してよかったです。また、このような機会があれば参加したいです。 ・学生さんが笑顔で楽しんでいてよかったです。